

---

Lv20

mori

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

L V 2 0

### 【Nコード】

N 8 1 6 7 Y

### 【作者名】

m o r i

### 【あらすじ】

L V が 2 0 までしか上がらない、勇者にはなれない主人公が勇者や仲間と共に魔王討伐を目指すお話です。主人公の戦い方はむしろFFよりになるかもしれません。重い話はきっと最初の方だけのハズ。

## 第一話 はじまりの日（前書き）

初めての作品です。

誤字脱字、駄文等あるでしょうが完結目指していくのでよろしくお  
願いします。

## 第一話 はじまりの日

誰だって一度は「主人公」に憧れたことがあるだろう。  
一国一城の主となる「王様」。

世界を股にかけ未知の秘境や宝を探しだす「冒険家」。

魔物はびこる城にて運命の相手を待ちわびる「お姫様」。

そして魔物より姫を救い出し、世界を平和へと導く「勇者」。

きっと誰もが自分もこうなってみたいと夢を見る。

しかし人生を生きていく中で自分の力を知り、妥協点を見つけていく。

そしてその中で幸せを掴んでいく。

それは当然のこと、だって誰もが「主人公」になれるわけではないのだから。

ここはとある城下町の一角にある民家。

今まさにここで新しい命が産まれようとしていた。

…… おぎゃあ!! おぎゃあ!!

バンッ!という勢いの良い音と共にドアが開かれる。

「産まれたか! レイ!」

青いバンダナを巻いた青年がベッドに横たわる女性に声をかける。

「ええ、無事に産まれたわあなた〜。」

「そうか！頑張ったな！」

それを聞いた青年は妻に抱きつきたい衝動に駆られるが、さすがに出産直後にそれはまずいだろうと思い留まる。

ふと目をやると部屋の机の上で産婆の手により産湯に浸かる我が子を見つける、近づいていくと産婆は青年に気づき笑顔で声をかける。

「元気な男の子ですよ、レイさんも健康そのものです。」

「ああ、ありがとう！助かったよ婆さん。」

やがて赤ん坊、妻に対する処置も終わり産婆が帰っていった。部屋に残ったのは青年とその妻、そしてその2人の愛の結晶のみ。母に抱かれ眠るわが子を見ながら青年は立ち上がり言った。

「お前とこの子はどんなことがあっても、絶対に守ってみせる！」

「あらあら別に危険なわけでもないのに〜、でも嬉しいわ、うふふつ、それで名前は決めているの〜？」

夫の言葉に頬を染めながらも嬉しそうな顔で妻は答える。

「もちろん決めてるさ、この子の名前は…」

これが後の世に魔王を打倒する勇者…の仲間であり、  
自分の力を決して諦めなかった一人の人間の物語のはじまりの日で  
ある。

## 第二話 いつもの風景

「ふう……」

日課となっている走り込みを終えて、汗を拭きつつ家に向かう。

ここは世界の南に位置する大陸にある城、アリアハン。かつては全ての大陸を支配する大国であったが、

過去に起きた戦争が原因で現在は他国との交流を絶っている……らしい。

その城下町の外れにある民家、表札には「ロック&amp;レイ&amp;amp;ウイル」と書いてある。

「ただいまー。」

「あらーおかえりなさいウイル、パパを起こしてきてくれない？朝ごはんにしましょう。」

そう言われて俺は寝室へ向かう。

そこにはもう年齢はおっさんなのに青年にしか見えない男が一人。ありえない寝相で幸せそうな顔をして寝ている。

「父さん、朝ごはんの時間だよ、起きて。」

「うーん……あいつに報酬を渡すまえに脱出するわけには……」

訳のわからない寝言を言っただけで一向に起きる気配がない。

大きな声を出しても揺すっても全く起きない、

はあ……仕方ない、あの方法で行くか。

「あ！あそこにまだ見ぬお宝」どこだ！」あ、起きた。」

ガバアツ！と今まで爆睡していたにも関わらず勢い良く跳ね起きる。

「父さんおはよう、もうごはんの時間だから、母さんも待つてるよ。」

「

あ、あれ…？お宝は…？あいつは…？と寝ぼけている父さんをおいて居間に向かう。

食卓にはすでにトースト、サラダ、スープなどの色とりどりの朝食が用意してあった。

母さんはすでに椅子に座って待っていて、あとは父さんが来るのを待つだけだ。

それにしても母さんも年齢的には父さんと同じはずなのに見た目は少女そのもの、

街で姉弟に間違われたこともある、我が両親ながら一体この二人は何者なんだろうか？

「どうしたの…？ぼーっとして？」

い、いや、なんでもないよと席に着く。心を読まれたら困るからなこの前うっかり口が滑って年齢の話をしたらすごい笑顔で「体いいのよ」

と苦さが限界突破したスープを飲まされた時は心から後悔した。

少しして父さんも席につき、3人で手をあわせて唱和する。

「いただきます。」



なんでも父さんが以前東の国に旅をした時そこでの風習であつたそうで、

命をいただく際の礼儀、ということでは我が家でも行なっている。

「今日もレイの飯はうまいな！一日の活力だ！」

「うふふ、そう言ってもらえると作りがいがあるわ。」

と、いただきますと礼儀よくはじめた割にはすごい勢いで朝食を平らげる父と、

それをにこにこと嬉しそうに見つめながら食べる母、マイペースで食す自分。

結婚してからもう10年以上経つのにこの二人、未だにラブラブである。

食事が終了すると再び手をあわせて唱和する。

「ごちそうさまでした。」

これも東の国の風習で、感謝の気持ちを表すそうだ。

食器を片付けていると父さんが「準備ができたなら外にこいよ。」と出ていく。

少しは自分で片付けなよと思いつつも父さんの分も片付け、母さんに行ってきますと外に出ていく。

これがいつもの我が家の朝のである。

## 第二話 いつもの風景（後書き）

とりあえず日常。

## 第三話 家族のきずな（前書き）

ちよつとシリアス？

### 第三話 家族のきずな

この世界には「加護」といわれるものがある。

なんでも生まれながらにして神から授かる力らしく、

その力によって身体能力の強化、呪文と呼ばれる奇跡を使うことができる。

「加護」は魔物と戦うことでのみ経験をつむことができ、

一定の経験をつむことで「加護」の力が強まり、より強い力を得ることができる。

しかしながらこの「加護」は全てのものに等しく…なんてことはなく、しっかりと個体差があるのである。それを昔々にどこぞの学者が発見し、「加護」の強さを最大Lvという概念で設定した。

そしてそれは「加護」の強さがその人間の強さの素質であるという風習を定着させた。

産まれたときに最大Lvを測定し、その子が戦うことが出来るかを見極められるのである。

もちろん加護の力がなくても日常生活を送るのになんら不便はない、あくまで魔物と戦うための超人的な力を手に入れるための手段なのである。

一般的な人が高くてLv50、素質の高い人で最大Lv70～80前後。

最大Lvが90を超える人はほとんどおらず、いわゆる「英雄」の資質を持つ人達である。

そんな中今も世界的に有名な冒険家である父ロック。

元魔法使いにして各方面に音に聞こえた研究者であった母レイ。

最大Lv96と最大Lv88の間に生まれた息子である俺ウィルは周囲の期待も大きかったらしい。

国王の前での最大Lv測定には多くの人々が注目していた。

しかし結果は思わず国王でさえ絶句してしまうものとなってしまう。

「Lv:20:？」

誰ともなくそうつぶやいた、そう、俺は「加護」の力が極端に弱かったのである。

低い人でもLv40はあつていいはずの「加護」が今までにない低さだったのだ。

当然のごとく周りからは「かわいそうに……」とか「残念でしたな……」との声が上がリ、

国王からも「あまり気にやまないように」と慰めの言葉が出た。しかし父ロックは大声で言い放った。

「別にあんたたちの慰めの言葉も同情の言葉もいらない！どんなことがあるうともこの子は俺たちの子供に変わりはなく、そこに「加護」の力は関係ない！」

母レイがそれに続く。

「そうですよ、ウィルは私達の息子、それは神にすら変えられない。それに「加護」の力が全てではないですからね。」

二人にそう言われた人達は何も言い返すことが出来ず、帰っていく夫婦を見送った。

しかしこの測定は多数の人に見られていた為にすぐに話が広まることになった。

「ロックとレイの息子ウィルは最大Lvが20しかない」

そのせいか昔から俺は周囲の子供たちにはいじめられ、大人達からは同情の視線を向けられて生活することになった。お使いで街に出れば、

「やーい、お前弱いんだってなー!」「(ヒソヒソ...)」ご両親はあんなに立派なのにねえ。」

と罵詈雑言のオンパレード、当然友達など出来ず一人でいることが多かった。

偉大な両親に不釣り合いな自分、どうして自分はこんなに弱いんだろう?なんで自分はこんな思いをしなければならないんだろう?そんな葛藤を感じていた時に言われた一言。

「お前本当はあの二人の子供じゃないんじゃないのか!」

当時の俺にはその言葉が心に強く突き刺さった。そんなことはない、と自分に言い聞かせながらもじわじわと広がっていく不安。

でも自分はこんなに弱いし、もしかしたらそうなのかも...

不安が疑念を呼び、とうとう両親に聞いてしまった。

「ねえ?本当に僕はお父さんとお母さんの息子なの?もし違うのなら正直に...」

とまで言ったところで頬に強い衝撃を感じると共に自分が吹き飛んでいることに気づく。

どうやら父さんに殴られ、壁に体を打ち付けたようで、鈍い痛みを感じながら薄れゆく視界の先に怒った顔の父と涙目の母を捉えながら意識を失った。

どれだけの時間が経ったのかはわからないが、目を覚ました時まず目に入ったのが母さんの顔だった、どうやら膝枕されていたらしい。

「やっと目を覚ましたわね、パパのはやりすぎだとは思うけどそれも仕方ないこと、それだけ怒っていたってことよ。」

あんなことを言ってしまった後だ、今更どんな顔をしていいかわからず思わず母さんから目をそらす。ふと部屋の隅に目をやると正座して首から“反省中”の札をぶら下げている父さんがいた。どうやら母さんからお仕置きされているらしい、と思っていると急にぎゅっと抱きしめられた。

「ウィル…周りがなんと言おうともあなたは私達の息子、それだけは疑わないで、そんな悲しい事を私たちに言わせないで…」

ふるえる声で俺を抱きしめながらそう言う母さん。

父さんも俺の目を見ながら言った。

「母さんの言うとおりだ！周りの目なんか気にするな！たとえ世界が敵に回ったってお前を、お前たちを守ってみせる！」

そんな父さんに、正座してなければかつこいいのにと思いながらも父と母の言葉に、嬉しさがこみ上げ、次に両親を少しでも疑ってしまった自分が恥ずかしく大声で泣きながら謝った。

そしてこの二人にの間に生まれたことを誇りに思った。  
どんなことがあっても二人は自分の味方でいてくれる、そう思うだけ  
で強くなれる気がした。

それから何か言われても気にならなくなった、自分の中に揺るがない  
ものがあるから。

そうなると周りは興味を失うのか次第にいじめなどもなくなって  
いった、友達は相変わらずいなかったが。

その頃から俺は父さんに戦い方を習うことにした、Lvだけが強さ  
ではないということを自分の力で証明したかったのだ。

もちろん父さんは二つ返事で承、パパだけずるい！と母さんから  
も炊事洗濯や

研究者であつた時に培った知識、技術などを教えてもらうことにな  
った。

そういえばその生活になればじめた時だったな、あいつと出会った  
のは…



### 第三話 家族のきずな（後書き）

次回勇者が出ます。

## 第四話 はじめての友だち（前書き）

まだちょっとシリアス？

## 第四話 はじめての友だち

それは両親から様々な技術を習っているある日のことだった。

父さんは戦闘もこなすが、基本的にはとうぞく（本人はトレジャーハンターと言い切っている）なので、

どちらかと言えば宝を探したり、敵から物をかすめ取る方が得意である。

ちなみにとうぞくが「加護」によって覚えることのできる呪文はフロミとレミラーマの2種類である。

フロミは自分の現在地の名称と階層を知ることができる呪文。

レミラーマは周囲に落ちている宝を発見することができる呪文である。

ぶっちゃけ戦闘には全く役に立たないがフロミは地図と併用すれば迷子になりづらくなるし、レミラーマは小銭を拾い集めたりするのに役立つそうだ。

そんなことを自慢気に話す父さん、なんというか…有名な冒険家なのにみみっちいぞ。

しかも迷子って…そういえばこの前北は上、南は下とか言ってたようないきがする、うん、忘れよう。

母さんいわくレミラーマはLv20で覚えられるので限界まで鍛えれば俺でも覚えられるそうだ。

ただしかしこさによって前後するため勉強は欠かさないほうがいいと言われている。

父さんはLv23で覚えたと言っていたがもしかしくなくても父さんはバカなのか？

なんてことをすっかり口走ってしまったのが運の尽き、いい笑顔の父さんに、

「今日はこの花を探してきてもらおうかな！」

と図鑑で初めて見る花を探してくるよう言われた。

どこに咲いているかなどは全く教えてくれず、漠然とこの近辺にあるとしか言ってくれなかった。

かしこいウィルなら俺の力なんぞなくても探し当てるだろう！

と完全に根に持っているようである。みみっちい…。

まあここらにあるならそんなに苦労しなくても見つけられるだろう、と探索に向かった。

「完全に甘く見ていた…」

外はすでに夕暮れ時、朝一番で出かけた俺は自分の見通しの甘さを嘆いていた。

花は確かにそこまで遠くない場所にあり、昼前には見つけることができた。

ただ咲いていた場所が問題だった。

「まさか崖の中腹にあるとは」

そう、そこまで断崖ではないが崖の途中にひっそりと咲いていたのだ。

もちろん上から飛び降りて見事着地！なんて訳にはいかない。

うつかり失敗すれば怪我だつてするし下手すれば命が危ない。

どんな高いところから落ちてでもドシャア！という音のみで無傷なのは狩人さんだけだ。

あの人達はきつと特殊な訓練を受けているんだ。

仕方なく父さんからもらったばかりのロープを近くの木に括りつけ  
ゆっくり降りていく、

そうなることを見越してロープを渡したに違いない、後で母さんに  
報告しよう。

花が咲いているのは2本しかなかったため、それらを懐に入れ、傷  
つけないようロープを登る。

そのせいで思つた以上に時間がかかってしまったわけである。今は  
家路を急いでいる。

ふとその途中通りがかった川辺で一人の子供が佇んでいるのを見つ  
けた。

別に無視しても良かったのだが、こんな時間に一人は危ないし、何  
故か声をかけなければという気になった。

「ねえ、君、どうしたの？」

声をかけるとその子は一瞬ビクツとなったあとこつちを見て、笑顔  
で言った。

「ちょっと考え事をしてただけだよ！そういう君は？」

「俺は父さんに頼まれたものを取りに行つてたんだ。」

お父さんの…そうなんだ…と複雑そうな顔でその子は呟く、気まず  
く思つたのか

君の名前は？と聞いてきたのでウィルだよと言っておいた、こちらが聞き返すと

「え？ボクのことを知らないの？オルテガの息子のボクを？」

なんかいきなりホントに知らないの？みたいな顔をされたのでちよつとむつときた俺は

「そもそもオルテガが誰かも俺は知らないよ、というかそんな可愛い顔してるから女の子かと思ってた。」

意趣返しのもりで言い返してやった、というか女の子と思ってたのは事実だ。

身長は俺より少し低めで中性的な顔立ち、つややかな黒髪を長めにのばしている、うんやっぱどう見ても女だ。

「かわいいって…！違うよ！ボクはれっきとした男だよ！」

頬をつつすら赤くしながらぷうつとふくらませて言うな、いよいよ女にしか見えない。

「それよりも君の名前を教えてよ、オルテガとかいう人とは関係なく俺は君の名前を知りたいんだ。」

そついうとその子は大きく目を見開いた後、次第にうつすらと目に涙を溜めながら…ってなんで泣く！？

「ボクは…ぐすつ…ボクの名前はアリスト…ひっく。」

それから泣いているアリストを慰めながら彼の話を聞いていた。

なんでも彼の父はオルテガといってアリアハン屈指の戦士だったらしい。

最大Lvは97、うちの父さんよりも高かったらしく、宮廷内にも相手になるものはいなかったそうだ。

そんな折、魔物たちの動きが活性化した時期があり、原因の解決のためオルテガは一人で調査に向かった。

そして火山で魔物と戦い帰らぬ人となっただけらしい。らしいというのはあくまで噂だからである。

父がダメならその息子と目を付けられたのがアリストらしく、小さい頃から「オルテガの息子」という肩書きで育ってきた。母、祖父からも「あの人の息子、孫」とまるで自分は父の代替品のような扱いを受けていたらしい。

偉大なる英雄の息子として、表面上は立派な「息子」としての自分を演じてきたが、その内はかなり寂しかったらしい。

そこにいきなりポンと現れた俺が「父とは関係なく君のことを知りたい」と言ったことで心の抑えが壊れたのだろう。

何度も急に泣いたりしてごめんねと謝ってきていた。

でも俺はその時全く別のことを考えていた。

…そうか、こいつは俺と同じなんだ。

俺の場合は両親がいたから孤独を感じても自分を壊さずにすんだ、でもアリストは…？

親にすら自分を見てもらえず、今までそれを誰にも悟られないよう生きてきた。

それは想像以上につらいことであり、少なくとも子供がすべきことではない。

だから俺は、アリストを抱きしめながら言った。

「もう泣かないで、君が寂しくなくなるまで一緒にいてあげるから。」

少しでも寂しさがなくなるように、自分と同じ思いをさせないために心を込めてそう告げる。

すると今まで泣いていたアリストの涙がぴたと止まり、顔が赤くなっていた、

きつと泣きはらした後だからだろう。とりあえず泣き止んだなら大丈夫だと思い体を離す。

「これから俺と友だちになろう、オルテガの息子じゃない、ひとりのアリストとして、そうだ、さっき採ってきた花、これあげるよ、友達の印だ。」

するとアリストはえっ？この花って…と戸惑いながらもこちらを見ながら花の咲くような笑顔で言った。

「うん！これからよろしくね！ウィル！」

時間もすっかり夜になってしまったのでとりあえずアリストと別れた、また明日ね！と言って。

実は俺にとっても初めての友達だったため内心かなり嬉しかったりしていた。



ウキウキ気分で家に帰るとそこには鬼が待っていた。

「あらら〜ウィル〜随分楽しそうね〜、何して遊んでたのかしら〜？」

いつもより口調が間延びしている母さんは確実に怒っている、経験がそう告げている。

というか後ろに禍々しいオーラをまとっている、ぶっちゃけチビリそっだ。

こうなったら覚悟を決めるしかないと今日手に入れた花を前に出しながら、

「ごめんなさい！どうしてもこれを母さんにプレゼントしたくて！」

と言った。もうどうにでもなれ！

すると感じていた威圧感が薄れ、恐る恐る顔を上げると、そこには満面の笑みの母さんが。

「私がこの花大好きなの知ってたの〜？嬉しいわ〜。」

なんとか俺は今日も生き残れそうである。

「でもいくら母さんのためとはいえあんまり危ないことしちゃダメよ〜。さ〜て、パパ〜？確かこの花って崖に咲いてたわよね〜？なんでウィルが持ってくるのかしら〜？え？ウィルが勝手に行ったって？じゃあウィルの持つてるパパのロープはなんなのかしら〜？ウィル？そのロープ貸してくれない？じゃあパパ行きましょうか〜、え、どこに？うふふ〜。」

そう言っただけで母さんに連れて行かれる父さん、俺は何も見えていない。

今日は色々と疲れたし、早く寝て明日に備えよう！

#### 第四話 はじめての友だち（後書き）

狩人さんは架空の存在です。

## 第五話 英雄の息子（前書き）

まだシリアス気味かも…

## 第五話 英雄の息子

ボクの名前はアリスト、偉大なる英雄「オルテガ」の息子だ。小さい時からそうだった、どこに言っても誰と話しても必ず、

「オルテガの息子」

というフレーズがついてくる。

お母さんやおじいちゃんでもさえも

「あの人の息子、あいつの息子でわしの孫」

と日に何度も言い聞かせるようにボクに言ってくる。

でもボクの名前は呼んでくれない、最後に名前を呼んでくれたのはいつだろう？

ボクにはあまりお父さんの記憶というのがない、小さい時にいなくなってしまったから。

正直に言うパンツ一丁にマントのむさくるしいおっさんぐらいの印象しかない。

だって会話もほとんどしたことがないから。

一度だけお父さんと一緒に街に出かけたことがある、断片的にしか思い出せないけれど。

その時も覚えているのは周りの人達がボクを「オルテガの息子」としか見ていなかったこと。

ただお父さんの顔がずっとバツの悪そうな表情だったのだけは今も忘れられない。

そして帰り道にボクを抱き上げていった言葉。

「お前は…ワシの息子だ、…その前に…であることを忘れるな、例え…なんと…とも。」

あの時お父さんはなんて言っただろう？あの時は早く帰りたくてほとんど聞いていなかった気がする。そのすぐ後にお父さんは魔物退治に行つて、そのまま帰つて来なかった。

本当はいけないことだつてわかっているんだけどボクはその時確かに

「嬉しい」と思つてしまつたんだ。

だつてこれでもうお父さんと比べられることはないと思つたから、ボクはアリストとして生きていけると思つたから。でも現実とは違つた。

国はお父さんのかわりにボクに白羽の矢を立てた、父のカタキは息子が取るべきだとして。

それから周囲の目が本格的に「オルテガの息子」としてボクを見るようになった。でもそれをボクは受け入れた、きっとこれはお父さんがいなくなつてもいいと思つた罰なんだと。

だからこれからはお父さんの息子として生きていかなければならないんだと。

でもやっぱり寂しい、その気持ちは変わらない。

寂しさを紛らわせるためによくボクは一人で川辺に佇むことが多くなつた。

一人なら誰にも気を使ふ必要がないから。

でもそんな時だつた、彼が現れたのは。

その日もいつものように川を見ながらぼーっとしていた。

ここは滅多に人が来ないからお気に入りの場所だ、っただけど…

「ねえ、君、どうしたの？」

急に声をかけられてびっくりする、本当は今人と話したくなかったんだけど、

ボクはオルテガの息子、無視なんてしようものなら周りから何と言われてしまかわからない、だからいつもの様に作り笑顔で

「ちよつと考え事をしてただけだよ！そういう君は？」

この時はなんで会話を続けようと思ったかは自分でもわからない、結果的にそれがいい方向に向かったんだけど。

「俺は父さんに頼まれたものを取りに行ってたんだ。」

その言葉を聞いて思わず顔をしかめてしまう。

こんな時間まで父親に頼まれたことに縛られるなんて、彼も父のことで苦労してるのかなと今思えば的はずれなことを考えていた。

流れを変えるために名前を聞いたらウィルと答えてくれた。逆にボクの名前を聞いてきたので思わず焦ってしまい

「え？ボクのことを知らないの？オルテガの息子のボクを？」

と言ってしまった、確かにボクの名前を知っている人は少ないかもしれない、ほとんど聞かれたことがないから、でもみんなボクのこととは知ってると思っていた。

すると彼はちよつとむつとした様子で

「そもそもオルテガが誰かも俺は知らないよ、というかそんな可愛い顔してるから女の子かと思ってた。」

ええ！？ここに住んでてお父さんを知らないの！？

というかボクが女の子って、ええ！？

色々と驚きすぎて気が動転していたボクは

「かわいいって…！違うよ！ボクはれっきとした男だよ！」

と演技するのも忘れて素の感情を出してしまった。

でもそんなことを気にするでもなく彼は言った。

「それよりも君の名前を教えてよ、オルテガとかいう人とは関係なく俺は君の名前を知りたいんだ。」

その言葉を聞いて世界が一瞬止まる、…え？今、なんて言ったの？

ボクの名前を知りたい？お父さんとは関係なく？ボク自身の名前を

…？

ボクに興味を持ってくれた？ボクを知りたいと思ってくれた？

ただ一言アリストだよ、そういえばいいだけのはずなのに、頭がそれを理解したときにはもうダメだった、目頭が勝手に熱くなっていき

「ボクは…ぐすつ…ボクの名前はアリスト…ひっく。」

気づけば泣いていた。



それから感情を抑えられなくなったボクは彼に次々と話をした。自分は偉大な戦士の息子として生まれたこと。

みんな偉大な父だけを見ていて自分を見てくれないこと。

父が帰らぬ人となってからは「立派な息子」を演じてきたこと。ずっと寂しかったことなどを泣きながら、謝りながら。

きつと変なやつだと思ってるよね、鬱陶しいと思われてるんだろうね…

初めてボク自身に興味を持ってくれたっていうだけなのに、勝手に何でも聞いてくれると勘違いして、彼にとっではどうでもいい話をひたすら話しかけてる自分に自己嫌悪を覚えていた。

もう少ししたら元に戻るから、そうすればもうきつと君と話すこともないだろうから、ちょっとだけ我慢してね。

そう思っていたら急に彼に抱きしめられ、ささやかれた。

「もう泣かないで、君が寂しくなくなるまで一生そばにいてあげるから。」

今ボクは自分の部屋のベッドの上で寝転んでいる。

机の上には彼が去り際にくれた花、それを見ていると自然と頬が緩む。

ボクにできた初めての友達、「オルテガの息子」ではなくアリストをみてくれる本当の友達…

でもなんでだろう？友達という言葉がしっくりこない。こんなに胸はときどきして顔は熱くなるのに。

でもいいや、明日また会ったら考えよう。

また明日！彼・・・ウィルが言った言葉を思い出し布団に入る。  
今日はよく眠れそうだ！

花瓶の中の胡蝶蘭の花だけがそんな彼を見ていた。

## 第五話 英雄の息子（後書き）

ウィルのセリフが微妙に違うのはアリストの聞き間違いです。

胡蝶蘭はよくわからないけどとりあえず調べた花言葉w

そして早くもストックが無いのでこれからはでき次第になります。

## 第六話 いつもの風景+1（前書き）

第一話から第五話までも見やすくなればとちょっと変えたりしてるので良ければそちらもご覧ください。

## 第六話 いつもの風景 + 1

今日も朝から日課となっている走り込み。  
ただ今までとは変わった部分がある。

「おはよう！ウィル！」

「おはよう、アリスト。」

アリストが参加するようになったのである。  
あれから俺たちは一緒に遊ぶようになり、お互いを知ることになった。

もちろん俺が最大Lv20までしか上がらないことも伝え、  
それでも強くなれることを証明するため努力していると伝え、  
何やら考えはじめていたようだが、ある日。

「ボクも参加してもいいかな？」

と聞いてきた。

俺としては一人よりもよっぽど楽しいし、  
願っても無いことなので了承したが、なんでまたと理由を聞いてみると。

「ウィルのことをもっと知りたいし、守ってあげたいから。」

と嬉しさ半分、複雑さ半分の回答が帰ってきた。  
俺に興味を持つてくれるのは嬉しいのだけれども、  
やはり面と向かって弱いと言われているような気がするし、

同じ男として守ってもらうのにはプライドがあるわけだ。

まあそこは俺が守ってもらう必要がないくらいに強くなればいい、ということまで自己完結した。

ちなみにこのアリストさん、「加護」による最大Lvを聞いてみたところ、なんと最大Lv???らしい。

ということは魔物と戦えば戦うほど強くなる?限界がない?

こいつはもしかして「勇者」なんじゃないだろうか?

なんて反則キャラなんだとさすがに嫉妬を覚えたが、アリスト自身はいいやつだし、特にその力で増長するようないこともしない、むしろ、こんな強い力があることに嫌気がさしていたようだ。

それにこればかりは生まれつきなんだから責めるわけにもいかない。

悪いのは全部「加護」だ、うん。俺神様のこと嫌いになりそう。

現時点では魔物との戦闘なんてしていないため特に差はない、むしろ先に訓練をはじめていた俺のほうがちょっと上なくらいだ。

走りこみを終わると家に一旦帰る、もちろんアリストと一緒にだ。

最近は食事もうちでとっていくことが多い。

初めてうちに来た時自分の家がいいのかと聞いたところ、

「鍛錬で出かけるって言えば、さすがはあの人の息子だ、で納得してくれから。」

と少しだけ寂しそうな笑顔で言った。

なのでそれ以上は問わず、好きなだけ食べていけばいいとだけ言うておいた。

最初は両親を多少警戒していたアリストだったが、

「お、初めて見る顔だな！とうとうウィルにも友達ができたか！レイ！今日はめでたい日だ、セキハンを炊くんのだ！」

「あらあら、いらつしゃい、ゆつくりしていつてね、セキハンはないけど腕によりをかけるわね。」

と、想像以上の歓迎ムードに逆に一瞬引いてしまったらしいが、すぐに打ち解けていた。

てかセキハンて何さ？と聞いたらなんでも東の国でめでたいことがあった時に作る真っ赤な料理らしい、うまいのが全くわからん。それにしても父さん東の国好きだなー。

「いただきます。」

合わせる手の数が4つになった食卓で今日も朝食がはじまる。

本日のメニューはトースト、サラダにくろこしょうと呼ばれるピリツとした風味の香辛料がふんだんに使われたベーコンエッグ。

余談だが我が家では割と普通に使われていたこれが、後に国の王が欲しがるほどの貴重品だと知ったときは本気で驚いたものである。

相変わらずすごい勢いで平らげる父とそれをにこにこ嬉しそうに見つめる母。

マイペースに食べる俺、全くもっていつもの光景に今はアリストが加わる。

はじめはくろこしょうの独特の刺激に驚いていたが、気に入ったのか今はくろこしょうだけつまんで風味を楽しんでいるようだ。

あ、アリスト、そのジャムとってー。

「はいどうぞ、ウィル。」

ありがとー、やっぱり食事は大勢のほうが楽しいな。

「そうだね、ボクこんなに食事が楽しいなんて感じたこと今までなかったよ。あ、ウィル、口の横汚れてるよ？」

「あらあら甲斐甲斐しいわね〜きつとアリストちゃんはいいいお嫁さんになれるわよ〜。」

と口の横どころか鼻の頭まで汚れてる父さんの顔を拭きながら言う母さん、父さん…犬かよ…

そして母さん、前提が間違ってるから、アリストは男だから。出会って速攻女と勘違いした俺が言えたセリフじゃないけど。ほら、アリストもなんか言ってやれよ。

「え！？そ、そんな照れちゃいますよ…それにボクはまだウィルとは…」

照れるなよ、お前自分が女だって言われてるんだぞ？俺の時は怒ってたじゃないか。

後最後のほう聞き取れなかったんだけどなんて言ったの？

「な、なんでもないよ！ほら、さっさと食べちゃおう！」

とがつつき出すアリスト、それを見ながらにこーと微笑む母、そして早くも外に向かっている父、意味がわからん。

あと父さん、食器いい加減片付けようよ…



side レイ

うふふ、アリストちゃんのウィルを見る目つき、アレは完全に恋する乙女の目ね。

さすがのロックも気づいたみたいだし、肝心のウィルは全くわかってなかったみたいけど。

はあ、あの子も父親似で罪作りな子になりそうね。

それにしてもアリストちゃんは男の子のはずなのになんでか大丈夫だっと思っちゃったのよね。

これはもう女の勘！てやつかしら。

まあいざとなったら本当の家族になっちゃえばいいだけだし、ロックを説得する準備をしておかないとね。

楽しくなってきたわ、うふふ。

side ロック

うーん、アリストはどうやらウィルを異性として見ているみたいだな。

思わず言っしまいそうになったがレイからオーラを感じて思わず逃げてしまった。

それにしても性別の問題はどうするつもりなんだ？

家族として迎えるのは構わんがさすがに嫁にするのはどうかと思うぞ？

まあとりあえずはウィルも気づいていないみたいだし今は置いておくか。

そろそろ冒険の虫がうずきだしてきたなー。

## 第六話 いつもの風景+1（後書き）

まだまだ冒険に出る気配がない…

しばらくは日常での内容が続くと思います。

冒険を期待されている方には申し訳ないですがもう少しお待ちください。

## 第七話　しょくぎょうと呪文と特技と（前書き）

今までで最長、というか完全に説明回です。

## 第七話　しょくぎょうと呪文と特技と

以前「加護」の力によって呪文が使えるようになることは説明したと思う。

これは魔物を倒し経験を積み、Lvが一定の値に達した時、自然と頭の中に使い方が浮かび上がってくるのだそうだ。

だからといってレベルが上がるたびにポンポンと呪文を覚えるわけではない。

村人Aがレベル99になった所で、畑仕事には役立つかもしれないが所詮は村人、そこまで強くはならないし呪文も覚ええない。

では呪文を覚えるにはどうすればいいか、それは教会での特殊な契約が必要となるのである。

16歳になった時を起点に、以後は好きなタイミングで「しょくぎょう」を選択することができる。

その選択したしょくぎょう、つまりは契約の内容によって神からの「加護」の形が変わる。

呪文は覚ええないが肉体の強化が一番強力で、重装備によるパーティの壁となる「せんし」。

せんしよりも攻撃的な強化がされ、特に徒手空拳による戦闘を得意とする「ぶとうか」。

肉体の強化は弱いものの、数多くの呪文による戦闘を行える「まほうつかい」。

神の奇跡の力を最も強く受け、癒しの呪文による補助を長所とする「そつりよ」。

魔物から多くのゴールドを見つけたり、よりよい商品を見抜く目利きが特徴の「しょうにん」。

すばやさによるアイテム奪取や、旅をする上でのさまざまな補助が可能な「とうぞく」。

強化はほぼないが、行動を起こすたびに別の意味で神が降りやすくなる「あそびにん」。

大きく分けてこの7種類である。

冒険者を目指すものは必ず一度は教会に行き、神の前にて自分の進む道を選ぶ、そこで契約することによって「加護」の力を強くするのである。

契約といっても難しいものではなく、神父の前で宣言し、それを受け取った神父が宣言したものにありがたいお言葉を与え、一枚の紙切れを渡すことで契約が完了する。

この紙切れ、常に所有者のLvを示すものであり、魔物との戦いによってLvが上がると書かれている数字が変わるので、自分の「加護」が今どのくらいの強さになっているのかがわかるという仕組みだ。

これは（俺の中ではすでに敵として認識されている）Lvの概念を見つけた学者が作ったものらしい、本来なら神父の言葉で契約は完了なのだが、Lvを知ることができるのは便利なことなので渡すのが慣習化したようだ。紛失すると再配布には10Gかかる、神が直接関与していないものとはいえ教会の方々も人の子ということだ。

少し話がそれてしまったが、しょくぎょうを選ぶ上で一番気を付けなければいけないのは、一度選択したものを変えることはできない、ということである。

せんしにしたけどやっぱり呪文を使いたいからまほうつかいになる

！という訳にはいかない。

昔酔っ払ったおっさんが、「30歳を越えた独身男性は皆まほうつかいになる。」と涙ながらに言っていたのを聞いたことがあるが、ただの迷信らしい。ずっとせんしのままだった。

安易に選んでしまう人も少なくないようで、結果的に自分の思っていたものと違い、こんなはずではなかった…と戦うことを諦めてしまふ人もいるそうだが、なので慎重に考えたほうがいいと母さんに言われた。

ちなみに父さんの話によると、世界のある場所にはダーマという神殿があり、そこではしょくぎょうを変えることができるそうなのだが、しょくぎょうを変えるとLvが強制的に1に戻されてしまう上に、神殿の場所も結構人の寄り付かないところにあるらしく、現実的な方法ではないらしい。そしてなによりも、

「中途半端でやめるくらいなら最初から選ぶなと俺は言いたい！」

父さんはダーマ神殿否定派であるらしい。

俺は父さんと同じとうごくになるつもりである。理由としては戦い方が同じな方が学びやすいと思ったのもあるが、実のところ消去法だったりする。

まほうつかいは俺では全ての魔法を覚えられないから断念、そうりよも同じ理由、何より俺は神にいい印象がない。

あそびにんは論外、なろうものなら母さんが泣く、しょうにんは別に商売がしたいわけではないので却下。

せんしとぶとうかは迷ったのだが、せんしは速さ不足、ぶとうかは装備の軽さなどから選択肢より消えることとなり、一番安定していそつなとうぞくを選んだのである。

それは安易な選び方ではないのかと突っ込まれそうだが、自分なりにじっくり考えた末の決定なので問題はない。

さて、呪文は確かに便利であり、強力な手段ではあるが万能ではない。

無限に使用できるわけではないし、ある程度強くならいと呪文も覚えていかない。

肉体の強化も弱く、使える呪文も少ない。

まほうつかいになった人達が一番初めにぶつかる壁がそれだそうである。

そこで呪文の力を過信しすぎるのは危険だという考えが広まり、人間は「加護」をもっと有効活用できないかと試行錯誤を重ねた。

そして作り上げたのが「特技」である。

その特徴は「加護」を部分的に強化し、特殊な力を引き出すというところにある。

例えば、現在とうぞくにとって必須スキルと言われているものの中にタカのめ、とうぞくのはな、しのびあしがある。



タカのめは、視力強化により近くにある建造物を探し当てる特技。とうぞくのはなは嗅覚の強化をし、周囲の宝を察知する特技。

しのびあしは、足元に「加護」の力をまとい、足音を消すことによって魔物に気づかれにくくなる特技。

特技と呪文の大きな違いは、特技は努力さえすれば誰でも覚えられるところである。

盗賊の必須スキル3つも、頑張れば他の職業でも習得可能なのである。

しかも習得にLvが関係しない、使えるようになるかは本人次第で、Lvが上がり「加護」が強くなれば威力も一緒に上がっていく、といったところである。

もちろん適正、というか覚えやすさはある、タカのめなんかは同じく目がよいしようにんは覚えやすいが、そつりよあたりは覚えづらいそう。

更に世界には、強い「加護」の力を利用したり、複数の特技を組み合わせた奥義を使う人達もいると聞いたことがある。これは基本的に開発した者オリジナルの技になることが多い。

というのもほとんどの人が使い方を秘匿してしまったため、後に伝わらず消えてしまうからだ。確かにせっかく開発した自分だけの技を他の人にも使われてしまうのは悔しいかもしれない。

さつきは奥義について聞いたことがある、と言ったが、実は父さんと母さんも奥義持ちだったりする。

父さんは「盗む」を昇華させた「ぶんどる」。

これはとうぞくのはなを魔物に使い宝を持っている相手を特定し、タカのめにより宝の位置、魔物の弱点を探し出し、速攻で相手に致命傷を与えつつものを盗む、というもので、父さんいわく「別に誰でも使える」ということなので秘匿はされていないのだが、戦闘中瞬時にその判断を行えるものはおらず、結果オリジナルの奥義のようない扱いになっている。

母さんは自らが開発した「燃える水」と呼ばれる液体が入った小瓶を敵に投げつけ、メラによって発火、爆発させる「ボム」を使う。

当初本人は、「四肢粉碎灼熱爆発地獄火炎瓶」という名前を付けたそうなのだが、周りの強い反対により変更したらしい。周りの人達の苦労がうかがい知れる。

もちろんボムもオリジナルになっている、燃える水の製造技術は母さんしか知らないし、投げた小瓶にメラを当てる技術など難易度が高すぎるのである。

二人からそれぞれ奥義を教えると言われていた、だがとうぞくはメラが使えない、なのでボムは断ったのだが、

「えー、いっつもパパばかりずるーい！いいもん、私はアリストちゃんに教えるからー！」

とアリスト強化計画を発動してしまった。

アリストはしょくぎょうとしてはまほうつかいになりたいそうなの

だが、Lvが際限なく上がるならそれを活かしてみればどうだと母さんに言われ、剣士としても戦闘を行えるいわゆる魔法剣士を目指すそうだ。

近接においては剣による戦闘、遠距離においては呪文を使った攻撃、中距離ではボムを雨あられのように降らせ魔物を殲滅するアリスト…想像すればするほど、俺アリストと友達でよかったと思う。

「…ふう」

今まで読んでいた本を閉じ、一息つく。あれ？なんかこの始まり方デジャヴ？

本の表紙を見ると「腐った死体も3日でわかる！初歩の呪文・特技レイ著」と書いてある。

母さんはネーミングセンスがないのか？確かにわかりやすかったけども。

ここは俺の部屋、本日は勉強の日で、戦う技術は必要だけれども知識がないと応用が効かないということで行なっている。

母さんが書いた本は題名はともかく中身はしっかりしているので読んでおいたほうがいいとは父さんの談。

肝心の本人は直感が服着て歩いているよう人間なので勉強は全くなかったらしいが。

ふと横に目をやると机に顔を突っ伏したまま夢の世界に旅立っているアリストを見つける。

「んにゅ〜…えへへ、ウィル〜…」

よだれを垂らしながら幸せそうな顔をして眠りこけるアリスト、こいつ実はかなり勉強が苦手である。表紙でまばたきの回数が増え、目次で目がトロンとなり、数ページ読み進めるまもなく意識を失ってしまう。

未来の魔法戦士がそれでいいのか？てか俺は夢のなかでどうなっているんだ。

そんなことを考えていると扉が開かれ、母さんが入ってきた。

「お茶入れてきたから休憩にきなさい〜、って片方はすっかりお休みみたいね〜。…アリストちゃん？」

と言われると急にビクン！と反応し、起き上がるアリスト。

「ん〜…、あれ？ここはどこ…？」

どうやらまだ寝ぼけているようである、体だけが反応するとは、いたい二人の間に何があったんだ。

「あれ？ウィル？ここどこ？確かさっき二人で教会に行ってたはずなんだけど…。」

「まだ寝ぼけてるのか？ずっと俺の部屋で勉強してたじゃないか、主に俺一人が。」

なんだ早くもしょくぎよう選ぶ夢でも見てたのか？と聞くとえ？あ、うん、そうだよ！と顔を真赤にしながら言うアリスト。恥ずかしい夢だったのか？でもお前はもっと目の前の問題に早く気づくべきだと思っんだ。

「アリストちゃん、寝る子は育つから寝るなとは言わないけど、時と場所を選ばないとね。さあちょっとこっち来ましょうか。」

母さんを視界に入れ、いつもより間延びしたその言葉を聞くと同時に顔が真っ青になっていくアリスト。

「れ、レイさん！？いえあのこれは違うんです！話を聞いてください！え？聞くからこっちに来なさいって？い、いやそういう意味じゃなくて！ウイル！助けて！ってなにお茶飲みながら遠い目で窓の外見つめてるのさ！？お前のことは忘れない？ひ、ひどいよ！いたっ！わかりましたレイさん！行きます、行きますからお願いだから耳引つ張らないでー！」

ウイルのうらぎりものー！という声を最後に部屋を出ていく母さんとアリスト。

一応あいつはよそ様の家の子供のはずなんだが、最近扱いに容赦がないな…強く生きてくれ。

ま、もう本当の家族みたいなもんだし遠慮はなくてもいいってことか。

さて、次はなんの本を読もうかな、「あそびにんをけんじやにする  
100の方法 レイ著」、すごくどうでもいい内容っぽいけど息抜  
きにこれにするか、題名についてはもう気にしたら負けな気がする。  
なんかすすり泣く声が向こうの部屋から聞こえてくるような気がする  
けどきつと空耳に違いない。  
そうして俺は再び本を読みはじめるのだった。

## 第七話　しょくぎょうと呪文と特技と（後書き）

というわけで説明回でした。できるだけ考えましたがきつと矛盾出てくると思いますのでご了承ください。この小説では特技についてはしょくぎょう固有にはしません。主人公強化できないので。

そして日常書くのが楽しい、なぜバトルありにってしまったのか。次回はおそらくまたレイさん無双になるきがする…。

## 第八話 レイのぱーふえくと呪文教室（前書き）

今回攻略サイト見ながら書きましたが、間違いありましたら指摘お願いします。



## 第八話 レイのぱーふえくと呪文教室

なんで… どうしてこんなことになってしまったんだ…

ここは薄暗い地下室。

周りは全て石造りの壁に囲まれ、陽の光が全く差しこまない部屋の中でロウソクのみが頼りなく揺らめいている。

殺風景な部屋の中にはほとんど物がなく、壁にはロープが数本括りつけてあり、不気味な印象を醸し出している。

そして今俺はこの部屋の中で起こった惨劇に圧倒され、体を動かすことも出来ず立ちすくんでいる。

床には俺の父だったものの、そして親友だったものが横たわっている。父ロック、友アリスト。

二人とも少し前までは元気な姿でいつもの生活を過ごしていたはずだったのだが、いまや父は体中をビクンビクンと痙攣させながら白目をむき泡を吹いている。

友はうつぶせの体制のままピクリとも動かない、息はしているのでなんとか命はつないでいるようだ。

この地下室には扉が一つしかない、まるで入り込んだものを決して逃さないと言わんばかりに。

そしてその扉の前にじごくのもんばんのごとく立ちふさがる黒い影。

「うつぶ〜、さあ後はウィル、あなただけよ。」

我が母、レイがその手にロープを持ち微笑を浮かべながら立っている。

本当にどうしてこんなことになってしまったんだろう…

時は少し遡る、俺とアリストはいつものように部屋で勉強をしていたのだが、急に母さんが。

「ちょっと二人ともこっちに来てくれないかしら。」

いつもの調子で呼んだので、居間に行くと、こっちこっち、と俺達を押す形である部屋の前まで連れていった。

そこは家にある地下室の前、ここは昔母さんから立ち入り禁止令が出ていたため俺は今まで入ったことはなかったのだが、アリストは知っていたらしく。

「ヒイツ！？こ、ここは！？今度は何をするつもりなんですか！ボクまじめに勉強してましたよ！？」

とものすごい拒絶反応を示していたことからおそらくここはお仕置き部屋なのだろう。

というかなぜ今回は俺まで？別にいい子であったとは言わないが特に悪いことをした記憶もないんだが…

だがアリストほどではないがこの部屋は危険な気がする、入ってはいけないと俺の中の本能が告げている。

正直逃げ出したかったのだが、母さんに押される形でここまで来たので後ろに母さんとアリストがいる、つまり動くに動けない。どうしたものかと悩んでいると背中を押され、部屋の中に強制的に入室させられた。

バランスを崩し倒れる俺、そしてその上にかぶさるように同じく倒れるアリスト。

「いたた…、大丈夫、ウィル？」

「ああ、大丈夫だから俺の上からどいてくれ。」

「あ、ごめんね、すぐよけるねって…上？あれ？この体制…もしかしてボク今ウィルの上で…」

急にぼそぼそなにか言いながらうつむくアリスト、いいから早くどいてくれ。

立ち上がり初めて入った地下室の中を見回すと気になるものを2つ見つけた。

ひとつは天井からぶら下がっている「レイのぱーふえくと呪文教室」と書かれた垂れ幕。

そしてもうひとつはその下にロープでぐるぐる巻きにされて転がっている父さんである。

全く状況が飲み込めずばかんとしていると母さんが宣言した。

「今日は普段の勉強の成果を確かめるために試験をします。」

時たまこうしてどれだけ学習した内容が身についているのか確認するのは気を引き締める意味でもいいことらしい。

抜き打ちになったのはたまたまさつき思いついたからだそうである。

「なるほど、それはいい考えだな。それで俺はなんでこんな所に縛られて転がされてるんだ？」

父さんが言う、確かに試験をするだけならここにいる意味はないはずだ。

「うふふ、それは、これのためです。」

そう言うて懷から小瓶を取り出す母さん。

中には何やら液体が入っているのだが、色がおかしい、虹色に輝いている。あんな液体この世に存在していいものなのか？

しかしそれを見た瞬間父さんとアリストの動きがピタッと止まる。

「ま、まさか……。」

「それは……。」

妙に汗をかいて焦りだす二人、それに答える母さん。

「そうです、先日とうとう完成した私特製ドリンク、その名も虹色七号です。」

小瓶の中を軽く揺すりながらにこにこと言う母さん。中の液体が揺れるたびにキラキラと光っている。

ん？七号ってことは一六号もあつたのか？

「あつたわよ、ね？パパ、アリストちゃん？」

その言葉に煤けた顔であ、ああ、そうですね…と答える二人、どうやら聞かないほうが良かったようだ。

で？その虹色七号をどうするの？

「決まってるじゃない、パパにはこれを飲んだらどうなるかじつに問題不正解者がどうなるかを見せてあげようと思つて。」

「今完全に本音が出たよな！？ていうか本音じゃなくても俺がひどい目にあうことが決定してるじゃねえか！？」

離せ！と体を動かし拘束から抜けだそうとしている父さん、言っちゃ悪いが芋虫みたいだ。

「無駄よ、そのロープ意思があるから、それにパパも問題に正解すればいいだけの話しよ。」

なるほど、父さんにも救済措置があるわけか。

というかなんだ意思のあるロープって、後で聞いたら昔鍊金術にはまっていた時に作ったものらしい。本当に何者だこの人は？

「問題は全部で5問、全て呪文関係の問題で1問でも間違えたらその場で失格となりまゝす。」

「よし、俺は逃げない！どこからでもかかってこい！」

おお、格好いいぞ父さん、芋虫状態でなければ。

「では第1問、氷結系の一番初步の呪文の名前は？」

「ブリザドだ！」

……。時間が止まった。

「はい不正解です。では実験、もとい罰ゲームです。」

「もう実験を否定する気すらないのかよ！？ってちよつと待て！俺間違ったのか！？あつてるだろ！？や、やめろ…来るな！ぬわー！  
—————！！！」

まるで息子を人質に取られ身動きがとれなくなったところにメラゾーマを食らったような悲鳴を上げ倒れる父さん、いや、息子健在だけぞぞ。

「さーて次はアリストちゃんの番ね。」

そう言われ恐怖が身を包んだのか下を向くアリスト、しばらく何かを考えていたようだ、顔を上げると何かを決意したような顔で俺の方を向いて言った。

「ねえウィル…ボク、ここから無事に帰ることができたら君に伝えたい言葉があるんだ、聞いてくれるかな…？」

急に言われて思わず、お、おうと答え、それを聞いたアリストが母

さんの方に向き直り、お願いします！と言った。

というかアリスト、その言い回しはとても危険な香りがする。生存率がほぼ0%になりそんな意味で。

「第1問、まほうつかいが最初に覚える呪文は？」

「メラです！」

「せいかゝい！では第2問、爆発系の初歩呪文は？」

「イオです！」

立て続けに2問正解、いい調子だ、頑張れアリスト！

「では第3問、氷結系の呪文は全部で何種類あるでしょう？」

「えーと、氷結系はヒヤド、ヒヤダルコ、マヒヤドだから…3種類です！」

…あ。

「不正解、ヒヤダインを忘れてます。」

そうなんだよなー、なぜか氷結系は4種類あるんだよな、しかもヒヤダインのみ効果範囲が広い。

それにして二人とも氷結系の問題で失格とは…きつとトラウマになるに違いない。

逃げてても無駄と判断したのか母さんから小瓶を受け取るアリスト、その顔は捨てられた子猫のようである。

最後にちらつとこっちを見て、ボクと友だちでいてくれてありがとう…と言つと中身を飲み干し、そのまま倒れ物言わぬ物体となった。

そうして冒頭に戻るわけである。

先に犠牲になった二人の様子を見るにアレは人が手を出してはいけないものに違いない、なんとしても正解しなければ。

幸い初めての試験だからかはわからないが、そこまで難易度の高い問題は出ていない。普段勉強しているなら平気なはずだ。

「では第1問、とうぞくがフロミを覚えるLvは？」

「Lv10だ！」

「正解、では第2問、爆発系最強の呪文は？」

「イオナズンだ！」

「正解、ウィルには簡単すぎるかしらね、では第3問、スクルトの効果と覚えるしよきよう、Lvを答えなさい。」

難易度が急に上がった！？いきなり3つも答えなければいけないとは、てかこれで3、5問でいいじゃん！  
だがまあこのくらいならまだ大丈夫！

「効果は味方全員の守備力上昇！覚えるのはまほうつかいとけんじ



「や！Lvはどちらも9だ！」

「せいかりい！さすがねウィル、母さん嬉しいわ。では第4問、ルーラとリレミトの違いを説明しなさい。」

お、ちょっと易しくなったな、旅人の必須呪文を間違えようもない、とうぞくは覚えなないけどね！

「ルーラは訪れたことのある町に一瞬で移動する、リレミトは洞窟などから瞬時に脱出する！」

「正解、ちなみに洞窟でルーラ使つと頭ぶつけるから気をつけてね。」

パパとママは洞窟で頭打って倒れてたママをパパが助けてくれたのが出会いなのよ、と二人の馴れ初めを語ってくれた。

なんというかも言葉に出来ない！母さんのことだから頭を打ったのは初めてではないはずだ、だからちよつとネジが外れてるのか？

「なんか今失礼なこと考えてたわね？では第5問、ニフラムとバシルーラの共通点を述べなさい。」

うおっ！心を読まれたのかいきなり難易度上がりすぎだろ！？しかもなんだその問題、全くわからんぞ！？

待て待て、落ち着いて考えよう、まずは2つの呪文の効果は…ニフラム…聖なる力で敵を消し去る。バシルーラ…敵をどこかへ飛ばす。だったはずだ。

覚えるのはLvは違うもののそうりょとけんじゃ、これは一瞬共通点かと思っただ、ニフラムはゆうしゃも覚えるはずだ。

なのできつと引っ掛け問題になっているはず、だまされないぜ、母さん。

ならば効果か？だがニフラムは敵を消すのに対しバシルーラはどこかにやってしまっただけ、根本が違う。

…ん？根本？

そういえば2つとも戦闘を強制的に終了させる効果だよな？でも2つとも実際に戦闘を行うわけじゃない…そこから導き出される回答は…

「わかった！2つとも魔物と戦った経験にはカウントされない！」

「せいかゝい！結構悩んでいたみたいけどよくわかったわね、偉いわよ。」

そう言っただけ抱きしめられ、頭をなでられた。ちよつと気恥ずかしいが褒めてくれたことは嬉しい。

そしてなにより虹色七号の餌食にならずに済んだ自分に心から賞賛を贈りたい。

これからも気を抜かずに勉強は続けることにしよう。

「さあ、おやつも用意してあるしそろそろ休憩にしましょうか。」

そう言っただけ部屋から出ていく俺と母さん、今日のおやつはいつもより美味しく感じられそうである。

地下室に取り残された2つの物体、その片方がうめき声のようなものを上げた。

「アリスト…生きてるか？」

「はい、なんとか…。」

「なんで俺はこうなっ たかいまだに分らないんだが…。」

「ロックさんはせめて氷結系くらいは抑えておいたほうがいいですよ、人のことは言えないけど…」

二人の男たちが、氷結系を極めようと決心した日でもあった。

## 第八話 レイのぱーふえくと呪文教室（後書き）

という訳で試験編でした。

レイさん当初こんなに強力なキャラではなかったんですがいつの間にかこんなことに。

そろそろ戦闘訓練もはじめらればと思います。

冒険は…まだ先かなあ…。

## 人物紹介 そのいち（前書き）

ほとんど出ていませんがとりあえず現時点での人物紹介です。  
まだ明かせない部分もあるのでさらっとしています。逆には本編で  
説明不足な部分の補足なんかもしていますのであわせてどうぞ。

## 人物紹介 そのいち

ウィル 男 性格やさしいひと

物語の主人公。

有名な冒険家の父、研究者の母の間に生を受けるが、生まれながらにして加護の力が弱く、最大Lvは20。

それが原因で幼少の頃よりいじめられていたが、両親の指導によりやさぐれたりせず成長した。

ただコンプレックスは抜けきれず自分の力不足をどうにかしたいと思っている。

その反動なのか、自分の力のできることは積極的に関わっていき、頼まれたことは断ることができないやさしいひと、悪く言えばおひとよし。

加護の力は弱いならそれ以外の技術で補えばいいと父より戦い方、母からは呪文に関する知識や研究成果などを教わっている。

父と同じくとうぞくを目指している、理由は一番安定していそうだから。

基本的には常識人だが、困っている人がいたら首を突っ込むことが多く知らないうちに単独行動になることもしばしば。

勇者に対しては多少の劣等感はあるが、初めての友達であるし、基本的には親友だと思っている（恋愛感情には全く気づいていない）。見た目は身長高めのドラクエ3とうぞくそのまま、目付きが少し優しいくらい。

一人称は「俺」

アリスト 男 性格さびしがりや

男の娘。見た目女勇者で中身が男という風に捉えてください。

加護の力は最大Lv???、つまりは無限に成長するチートキャラ。

偉大な父オルテガの息子と小さい頃から周囲に言われてきたが、本人にとつての印象はパンツ一丁にマントのむさくるしいおっさん程度（あまり覚えていない）。

母からは「あの人の息子」、祖父からは「あいつの息子でわしの孫」、まわりからも

「オルテガさんの息子」とほとんど自分を見てくれる人がおらず、表面上は立派な人間を務めていたが、常に孤独を感じていた（友達がいないかった）。

ある日一人寂しくうずくまっていたところにウィルが現れいつも通りの自分を演じようとするが、ウィルに見抜かれてしまふ。ここで単純に友達としての関係になればよかったのだが、あるうことがウィルの言った、

「もう泣かないで、君が寂しくなくなるまで一緒にいてあげるから。」という言葉を

「もう泣かないで、君が寂しくなくなるまで一生そばにいてあげるから。」と聞き間違えた上に、何をトチ狂ったかそれをプロポーズ

の言葉と受け取りそれ以降彼に恋愛感情を抱く（2人とも男です）。

それからウィルと共に行動する（くつついて回る）ようになる。  
Lvが上がらないがそれに悲観すること無く、諦めずに努力を続ける彼に惚れ直すと共に、自分が守ってあげればいいという結論にいたり、ウィルと一緒に訓練を始める。

現在は近接戦もこなせるまほうつかい、いわゆる魔法剣士を目指しており、レイの指導のもと日々特に知識方面を重点的に訓練している。

だからと言って冒険をしたいとか父親を探したいとかではなく、あくまでウィルと平穏に暮らせればいいと思っている。

一人称は「ボク」

ロック 自称トレジャーハンター 性格いのちしらず  
ウィルの父、世界的に有名な冒険家。最大Lvは96。

直感的な行動により様々な業績を残すが、本人はあまり自覚していない。

かしこさは低めのお馬鹿さん、時々別の世界の言葉のような単語を使う。

しよくぎょうはとうぞくなのだが本人はあくまでトレジャーハンター  
ーと言い切っている。



攻撃とアイテム奪取を同時に行う「ぶんどる」は現在彼にしか使えない奥義。

妻、息子のことを大事にしており、ウィルには加護がないからと落胆したりせず。

むしろそんなものはなくても強くはなれると彼に戦い方を教えている。

ウィルが生まれてからは家族を守るために家にいるが、息子に友達もできたし鍛えて強くなってきたのでそろそろ冒険に出たいと密かに思っている。

アリストについては家族になるのは構わないが、嫁？としてくるのはさすがにいかんだろうと思っている。

見た目はFF6のロックそのまま、口癖は「守ってみせる！」

レイ 主婦、元研究者 性格のんきもの  
ウィルの母、元まほうつかいにして各方面に音に聞こえた研究者。  
最大Lvは88。

普段は何も考えてないようなおとぼけキャラだが、興味が湧いたら突き進む。

夫同様ウィルを愛しており、彼が強く生きられるよう色々と教育する。

怒るといつもより口調が間延びする。

自作の燃える水と呼ばれる液体とメラの組み合わせによるボムを得意技とする。

ロックとの出会いは、洞窟内で間違えてルーラを使ってしまい、気絶していたところを彼に助けられたのが始まり。

見た目はロックと同じくFF6のレイチエル、名前は原作的に四字のほうがいいかなと短縮。作者が個人的にこのカップリングをさせてあげたいがためだけにこうなりました。

ちなみにアリストについては思うところがあるのか家事を教えたり強化計画を発動したりと何かと応援している。

## 人物紹介 そのいち（後書き）

という訳で人物紹介でした。

ちなみに作者はFF4〜6が大好きなのでこれからもちよくちよく出てくると思います。

というかおそらく次回出る予定ですw

またある程度人物増えてきたらその都度紹介さらっとしていきます。

## 第九話 師匠（前書き）

なんとか間に合いました。

今回からは戦闘訓練編、新キャラが二人ほど増えます。

## 第九話 師匠

「すまん、ウィル。冒険が俺を呼んでいるんだ！」

「へ？」

いつもの勉強ではなく、その日は父さん指導のもと特技の習得に励んでいた時のことだった。

本来なら戦闘訓練をしたかったのだが、まだ体ができていない状態では危険が増すし、先にある程度「加護」の部分強化ができたほうが技術も伸びやすいと珍しくまともなことを言った父さんの方針に従っているのである。

それからは以前述べたとうぞくの必須スキル3つを中心に練習をはじめた。

「加護」の部分強化自体は実はそんなに難しいことではないらしく、うつすらと体にまとうている「加護」を強化したい場所に集中させることによって行う。

目に集中すればタカのめになるし、鼻に集中すればとうぞくのはなになるといった感じだ。

本来の用途である建造物の発見や、周囲の宝の察知に使うのならば覚えるだけでもいいのだが、父さんのぶんどるのようにならば応用させるとなると、素早い発動が必要されるため、そこは要練習という

ことである。

俺は一番初めが苦勞した、準備段階として自分のまとっている「加護」の感覚をつかむところから始まったのだが、思い出して欲しい、なぜ俺がいじめられていたのかを。

そう、もともと「加護」の力が弱く、しょくぎょう？は村人でLv1の俺をまとう「加護」はかなりひ弱だったのだ。そのせいでなかなか特技の習得の段階に進むことが出来なかった。

来る日も来る日も集中し、自分の「加護」を探しだすことに必死になった。

父さんはなんか体中にモワ〜としてるやつだ！と感覚的だから意味がわからず。

母さんにはこれを飲んだらわかるわよ、と何かを飲まされ生死の狭間をさまよったが結局わからずじまい。

一発で感覚をつかんだアリストは応援してくれたが、逆に俺のメンタルを傷つけていった。

そうしてようやく見つけた時はあまりの嬉しさにアリストに抱きついてしまい、アリストは頭から煙を吹き出し失神してしまった。

そりゃあ男に抱きつかれても嬉しくはないだろうが気絶するほど嫌がらなくてもいいじゃないか。

そこからは意外とすんなり次の段階に進むことができた。

集中し、自分の「加護」を実際に体の一部分に集めていくのは先ほどの説明の通り俺にとってはそれほど難しくはなく、初歩的ではあるが3つともスキルを使用することはできた。

アリストは集中するのが苦手らしくなかなか「加護」の部分強化がうまくいっていなかった。

今も練習中なのか目をくわっと大きく開きながらむむむ…！とか言っている、それはただ力んでいるだけじゃないのか？

そして俺は3つのスキルの練習のために父さんが作り出した訓練器具を使っている。

タカのめは長距離での視力測定、とうぞくのはなは袋がいくつかぶら下がっており、その中からゴールドの入ったものだけを嗅覚で探し当てる。

しのびあしは貝殻が敷き詰めてある仮設の通路を音を立てないように歩くというものである。

そんな毎日をごす中、今日も今日とていつものように訓練を始めようと思った矢先、父さんが先ほどの意味のわからないことを言い出したのである。

「本当はお前が成長するまでは控えようと思っていたんだけどな、アリストっていう友達もできたしお前自身も強くなることを選択した。そしてなにより俺の中の冒険心が叫び続けているんだ！」

きつと3つ目が本心なのだろう。

そして確かに強くなることは選択したけども肝心の戦い方をひとつも習ってないんだ、そこはどうするつもりなんだよ？

「心配ない！ちゃんと知り合いに訓練をしてもらおうよう依頼してる！」

なんでも俺とアリストそれぞれに戦い方を教えてくれる人を用意してくれているらしい。

言われてみれば俺はとにかくアリストは剣での戦闘がしたいみたいだからな、父さんとはスタイルが違うわけだから当然といえば当然か。

おそらく明日頃には到着するだろうからしっかり鍛えてもらおうんだぞ！

と言いつつ残し風の様に去っていった父さん、てかもう行っちゃうのかよ！？

…えーと、整理しよう。

父旅に出る　俺取り残される　戦いを教えてくれる人は明日来る  
今日は？

「いつもどおりの訓練でもするか…。」

俺はしのびあしの練習を始めるのであった、だって他の一人じゃできなないし。

ちなみにアリストは目に力を入れてずっと開いていたせいか目が真っ赤になっていたが、結局今日もうまくいかなかったらしく落ち込んでいた。



次の日、いつものように家の近くの訓練場所ですろそろ始めようかと話していると、男の人と女の人が俺達に近づいてきた。この人達が父さんの言っていた人たちかな？と思い挨拶をしようとしたら先に女の人が口を開いた。

「あんだ達がロックの言ってたウィルとアリストかい？」

意外とワイルドな口調の人らしい、とりあえず「そうです」と答えると、

「あたしはアイラっていうんだ、しょくぎょうはせんしをやってる、剣を主体に戦ってるからアリストっていう方の先生になるのかな。とにかくよろしく頼むよ。」

「あ、じゃあボクの先生ですね、よろしくお願いします！」

とアリストも挨拶をする、結構気さくな人みたいだ。

ただ、格好が：長い黒髪に凜とした顔つき、そして赤を貴重としたビキニのような露出の高い鎧からは大きな谷間が覗いていて、正直目のやり場に困る。

よくアリストは大丈夫だなんてなぜ俺の方を睨んでいるんだ？聞いてみたらなんでもないよ！とそっぽを向いてしまった。その様子を見ていたアイラさんは何かを察したようで。

「アハハ、じゃあアリストはこっちで私と訓練しようか。」

と言って少し離れた場所へ行ってしまった、残されたのは俺ともう一人の男の人。

格好は言葉の通り黒づくめ、上から下まで黒の装束に身を包んでおり、更には顔の前にも黒い布をつけているため目しか見えない。

「あ、あの…」

「…。」

「俺、ウィルって言います。父さん…ロックの息子です。これからよろしく願います。」

「…。」

き、気まずい、てか一言も話してくれないんだけどこの人…

そういえば名前すらわからない、聞いてもいいのだろうか？よし！ここは勇気を出して！

「え、えーと、お、おなまえ…。」

「…あいつから報酬をもらっている以上仕事はするが慣れ合うつもりはない。」

俺の勇気は無残にも砕け散った、名前も教えてくれないってどうしろっていうんだよ！

向こうはなんか楽しそうに話しながら訓練してるっぽいのに、もう心が折れそうだよ父さん…

ウォン！！

俺が現実の厳しさに挫けそうになっていると、後ろから何かの聲がし、急に服を引っ張られた。

驚いて何が起きたんだと引っ張られた方を見ると、黒と茶の毛色の犬が俺の目の前に現れた。

どっかから迷い込んだのか？それにしても立派な犬だなー、どれ、現実逃避の意味も込めて存分に可愛がってやろうじゃないか。

よーしよしよしよしと頭、首、体とまで回してやると、ヘッヘッヘッヘッと舌を出しながら気持ちよさそうに目を細めるわんこ、ささくれだった俺の心が癒される。

「まさか…インターセプターが懐くとは…。」

声のした方に目を向けると何やら驚いている様子の黒づくめの人、もしかしてこの人の飼ってる犬だったのかな？名前っぽいの呼んでたし。

動物は飼い主に似るからこの犬もこんなに黒いのかなーなんて馬鹿な事を考えていると、俺の顔を見ながら黒づくめの人が声をかけてきた。

「気が変わった、お前には俺の戦いの技術全てを叩きこんでやる。弱音を吐こうが容赦はしないから覚悟をしておけ。」

そう言っただけで背中を向け去っていく。  
え？なんで？さっきまで全くやる気なさそうだったのに。もしかして犬？犬が決め手？

全く意味がわからないがわかることはひとつ、戦い方はちゃんと教えてくれるということ、ならば言う言葉は決まっている。

「はい！これからよろしくお願いします！えっと…。」

「…クライドだ、俺のことはそう呼べ。」

「は、はい！よろしくお願いしますクライドさん！」

俺の言葉を聞き少しだけこっちを見ると、また背を向け歩いて行く。

こうして俺にも師匠ができた、全て、というくらいなのだから相当きつい毎日にはなるだろう。怪我もするし弱音も吐くかもしれない。

でも俺のために教えてくれるといったんだ、どんなことでも乗り切ってみせる！

去っていくクライドさんの背中を見つめながら決意を新たにす俺だった。

…あれ？背中？

「クライドさん、今日は一体何をするんですか？」

「…とりあえず今まで通りの訓練をしておけ。」

逃げるようにその場から離れていくクライドさん、どうやら考えていなかったらしい。

少しだけ脱力した俺はしのびあしの練習を始めるのであった、だっ

て一人なんだもん…

おまけ

「そういえばクライドさん、父さんから報酬をもらったって言っていましたけど何をもらったんですか？」

「これだ。」

クライドさんが取り出したのは深紅の刀身をした長めのナイフ、小太刀というらしい。

「これはいちげきのやいばと言ってな、名前の通り時折敵を一撃で仕留めることができる。俺のような戦い方を行うものには重宝する。」

「そ、そうなんですか、でもそれが重宝する戦い方って…。」

「それはお前がこれから身を持って知っていくことになる、楽しみにしている。」

俺は暗殺者にもなるのだろうか。  
自分の未来の姿がああ真つ黒な格好だと思つとすこしばかり気が重くなったある晴れた日のことであつた。

## 第九話 師匠（後書き）

まさかの戦闘訓練に入らず終了、本当に申し訳ないです…。  
黒づくめの人のほうなんです、せつかくなので本名で出しました。  
アイラはまんまで。時系列は完全無視です。

今更ではありますが評価していただいた方、お気に入り登録してくださった方、なにより読んでいただいた方々、本当にありがとうございます。

グダグダでなかなか先に進みませんがこれからもよろしく願います。

## 第十話 訓練風景ウィル編（前書き）

今回は修行編です。

## 第十話 訓練風景ウィル編

今日からはクライドさん指導の元戦闘訓練が始まる。

お互い別の所で訓練したほうが効率がいいというアイラさんの言葉により、しばらくアリストとは別行動をすることになった。

意気揚々とするアイラさんに引つ張られていくアリスト、心なしか顔がやつれているように見える。

と言うのも二人と母さんは顔なじみらしく、俺達に稽古をつけてくれる間はうちで寝泊まりすることになったのだが、夜に母さんとアイラさんが酒盛りをはじめてしまい、半ば強制的に参加させられたアリストは結構ひどい目にあつたようである。

ちなみにクライドさんは身を隠していたのだが、インターセプターが隠れていなかったため居場所を特定され連行されていた。

まるで脱出不可能な大陸に一人取り残され死を覚悟したかのような目で、「あいつのことを頼む……！」と俺に告げながら連れて行かれるクライドさんに涙せずにはいられなかった。

俺？俺はインターセプターと一緒に寝たよ？犬ってもふもふでいいよねー。

話を戻そう、ここはいつもの訓練場。

朝起きても姿を見かけなかったのとおりあえず向かってみたところ



既にそこで待っていた。

インターセプターにエサをやっていたようで俺に気づくところらを向いた、顔に巻かれた布の隙間から見える目は赤く充血してこう言っではなんだがすごく怖い。やっぱり眠れなかったのだろうか。

「おはようございますクライドさん、あの、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、問題ない。」

それよりも早速はじめるぞ、と少しかすれた声でいうクライドさん。見た感じ大丈夫ではなさそうだが、あまりうるさく言っても仕方が無いことなので気持ちを切り替える。

そこからはまずクライドさんの戦闘方法について話を聞くことになった、大きく分けると3つになるとクライドさん。

一つ目はナイフ、または小太刀を使った戦闘方法。

二つ目はインターセプターとの連携攻撃。

三つ目は投てき術、「なげる」による攻撃、だそうである。

一つ目はできるだけ無駄な動きを省き、的確に急所を狙う。そういった意味ではお前の父親のぶんどるに似ているかもなと言われた。

二つ目は自分が敵の攻撃をいなし、その間にインターセプターに攻撃をさせる。敵の攻撃を防ぐ、または受け流す技術が必要となる。

そして三つ目はクライドさんの奥義とも言えるらしく、目、腕の「加護」強化により石だろうがなんだろうが必殺の武器と化すそうだ。

その気になれば馬の糞で敵を倒すこともできるらしい。その気にならないことを祈るばかりである。

「どれも一番重要なのは目の強化となるが…お前は今どのくらい使いこなしている？」

「えっと、父さんからはそのLvでそれくらいなら使いこなしている方だとは言われましたけど。」

ふむ、なら大丈夫か、ではなげるの訓練からはじめるとしようと言って何やら人の大きさをどの板を持つてくるクライドさん。

その板には人の形をした線が描かれており、更に急所となるであろう頭、喉、心臓の部分に印がついている。

「実戦では対象は動きまわる上に魔物というのは人型でないことが多い、だが初めての練習であるしとりあえずはこれでいいだろう。」

的から距離を取りはじめるクライドさん、あんな板あったっけ？もしかして作ったのか？

二日酔いの体に鞭打ちながら板に人型の絵を描いていくクライドさん、シュールだ…

思わず吹き出してしまった俺の様子に気づくことはなく、これを使ってもらう、と手渡されたのが刃が十字の形をした小さな鉄の塊。

しゅりけんと言う投てき武器らしく、これならばちゃんと的に当たりさえすれば必ず刺さるので上達が見えやすいとのことだ。

「さっきも言っただが重要なのは目と腕の強化だ、相手の急所から目を離さず避けられない速度で放て。」

そういつて的の方に向き直り構えをとる。そして次の瞬間。

ドカカカカカ！

いつの間に投げたのか全くわからない、そんな速さで腕を振りぬく板の人型を見ると、急所の部分に各2つずつのしゅりけんが刺さっていた。

「す、すげい...。」

「さあ、次はお前の番だ、やってみろ。」

なんでもないような振る舞いで俺を促すクライドさん。

俺は的の前に立ち、見よう見まねで構えをとる。

クライドさんみたいにいかないのはわかってる、でも大事なのは集中だ、まずは目を強化し対象を捉える。

更に集中、決して目をはなさない、天地と一体となり、宇宙と和合すべし。

そして腕を強化、一瞬で振りぬく、そこだ！

シュカツ！

見事しゅりけんは的に刺さった！…人型の股間部分に。

下手したら急所に刺さるより恐ろしいかもしれない、思わず小さな悲鳴を上げながら前かがみになってしまった俺は悪くないはずだ。

クライドさんもなんとも言えない表情で、

「うむ…初めてにしては上出来、というべきなのだろうか…。」

ものすごく微妙な空気の中練習は再開された。

その後は刺さったり刺さらなかったりを繰り返しながらしゅりけんを投げ続けた。ある程度時間が経った後、あまり長くやっても集中力が持たないとのことでの練習は切り上げることになった。

続いては実際の戦闘訓練にはいるらしい。

こちら俺の実力がわからないため、とりあえず今回はどのくらい俺が戦えるのかを試すらしい。俺は防衛に徹するから好きなように攻撃してくるといいと言われ、構える。

以下あまりにひどい戦いのためダイジェストでお送りいたします。

クライドが あらわれた！

ウィルのこうげき！ ミス！ クライドにダメージを与えられない！

クライドは ようすをみている

ウィルのこうげき！ ミス！ クライドにダメージを与えられない！

クライドは ようすをみている

ウィルは 石をなげつけた！

だが クライドに はじかれてしまった！

はじかれた石が ウィルの頭にちよくげき！ かいしんのいちげき！  
ウィルは ちからつきた！

クライドは ことばをうしなっている

俺の前途は多難なようである。

おまけ 昨日の夜

「アハハハ！」

「うふふふ〜。」

「うう…。」

「…。」

二時間後…

「アハハハハハハ！」

「うふふふふふふ〜。」

「も、もうダメ…。」

「……。」

夜はまだまだ長い…。

## 第十話 訓練風景ウィル編（後書き）

修行、ウィル編でした。

次回はアリスト編になる予定です。

あと念のため注意なんです、あらすじにも書いてるとおりあまり重い話にはしないつもりです、作者がそういう空気に耐えられないので…。

ただどうしても最初は設定とかの関係で重くなってしまいましたが、基本的にはこういうノリで行けたらと考えています。

では長くなってしまいました。が次回もよろしく願います。

## 第十一話 訓練風景アリスト編（前書き）

修行、アリスト編です。



## 第十一話 訓練風景アリスト編

ウィルとクライドが訓練をしているのとちょうど同じ時間、別の場所ではアイラとアリストが訓練を開始しようとしていた。

昨夜あれだけの酒盛りを繰り広げたのにもかかわらず元気いっぱい  
のアイラ。鼻歌まじりで準備をしている。

「うっ…、なんでアイラさんは平気なんだろう…？」

対して顔色がすぐれないアリスト、それもそのはず、彼は二匹のう  
わばみを相手に奮闘していたのだ。

しかも彼は未成年ゆえに酒をのむことができない、素面で酔っぱら  
いの相手をするのは想像を絶する辛さがある。

レイからはロックとの出会いを中心に惚気話。

アイラからは逆に全く出会いがないと愚痴を延々聞かされて終始グ  
ロッキー状態だった。

ただレイからウィルの小さい時の話や、アイラからは気になった相  
手を誘惑する方法などを聞いた時は目をキラキラさせながら次は次  
はと話を促し、言葉を深く心にきざみこんだようである。

「クライドさん、大丈夫かな…。」

今はここにいないもう一人の犠牲者を思い浮かべる。

はじめは見た目と雰囲気少し驚いて話しかけづらかった彼だったが、ウイルからも改めて紹介されたし、なにより昨日の晩に妙な連帯感が生まれた。

酒盛りの最中アリストより先に二人の猛攻にあっていた彼、始まる直前にアリストに対し、

「はじめは俺が出来るだけ時間を稼ぐ…だが次はお前の番だ、覚悟しておくんだな…。」

と告げて自ら戦火の中に飛び込んでいった。

「いい年していつまでそんな真つ黒な格好してるんだよ！」とか「それで娘さんには会いに行ったのかしら？」とか根掘り葉掘り聞いてこようとする二人にひとことふたこと、もしくは無言を貫き対応していたのだが、結局は潰されてしまった。

考え直してみれば先に潰れてしまった方がのちのち楽だったのではという思いはあるにはあったが、せつかく進んでくれたことなので素直に感謝しておいた。

朝には既にいなくなっていたので大丈夫だとは思うが、帰ったら酔い覚ましの薬草を渡そうと考えているアリストであった。

「さーて、そろそろ戻っておいでアリスト。」

アイラにそう言われてはっと意識を取り戻す、どうやら思考の海に沈んでいたらしい。

これから訓練が始まるんだ、と気を引き締めなおす。

「さて、昨日も言ったとおりあたしは剣を主体に戦っているんだけど、剣は使ったことあるかい？」

「いいえ、全く無いです。とアリスト、それもそのはず、知り合いに剣を扱う人はいなかったし今まではずっと基礎の訓練をしてきたのである。

ならまずは剣自体になれてもらわないとね、そう言っただけの剣の形をかたどった木の棒をアリストに手渡すアイラ、最初はこれを使っただけの素振りから行うそう。

「えっと、振り方なんかはどうすれば……？」

「ああ、そうだったね、せんしの場合は盾も使うから基本的には片手で振ることになるね。でもあたしはちょっと特殊で両手で使うこともあるんだ。」

だから右、左、両手持ちと均等にこなした方がいいねと言われる、両手持ちの理由はまたあとで教えてくれるらしい。

そして素振りをする際に重要なのが、必ず対象をイメージしながら行うということだそう。

例えば同じ回数行ったとしてもイメージするかしらないかでかなり効果が変わってくる、明確なイメージをすることが出来ればそれはもはや実戦と変わらない。

「ただ今は戦いのイメージ自体がないと思うからとりあえず殴りや

すい相手でも頭に浮かべるといいよ。」

「殴りやすい相手、ですか…。」

眠気覚ましにもなるだろうしやってみるといいよ、しばらくしたらまた来るから、と言って去っていくアイラ。

あれ？もつと詳しい振り方とかは教えてくれないの？と少々腑に落ちないところはあったが、なにはともあれ初めての戦闘訓練、気を取り直し木の剣を構え、殴りやすい相手を探す。

ウィル：絶対に無理、レイさん：後が怖いので無理、アイラさん：同じく後が怖いので無理、クライドさん：昨日の今日だから殴りづらい、ロツクさん：まあ、ありかな？

なかなか誰を対象にするか決めかねていたが、ふとものすごく最適なイメージが目の前に現れる。

筋骨隆々のたくましい体に広い肩幅、歴戦の勇士にふさわしいその体躯にはビキニパンツとマントが装着されている。

そう、かつてアリアハンの英雄と呼ばれ、自らの父でもある「オルテガ」その人であった。

それにしても父が一番殴りやすく、次点が親友の父とは二人が浮かばれない。

本人のことはほとんど覚えていないのにイメージだけがしっかりと出てきたそれを見てニヤツと笑うアリスト、なんのためらいもなく素振りをはじめめる。

まずは右上から相手の左肩を打ち据えるように袈裟斬り、次いで振り下ろした勢いを利用し左から右へと水平に薙ぎ払い右手に持つ武器を叩き落す。

そのまま今度は右下から左上への切り上げにより左に構える盾をはじき飛ばす。

一旦呼吸を置き、渾身の力を込めて相手の無防備になった喉へと突きを繰り出す、相手は死ぬ。

その後も様々な方法で父の影を殴り続けるアリスト、その顔は清々しく、常に笑顔であった。

そんな様子を少し遠巻きに見ていたアイラは、

「あの子、ホントに剣を使うの初めてなのかい？随分と手馴れているように感じるけど……」

急に剣を後ろに構え、少し力を溜めたような素振りを見せた後「イヤアア！」と言いながら回転切りを放つアリスト。

「それにしても誰を想像したのかしらないけど、きっと恨みでもあったんだろうねえ……」

彼に秘められた才能に興味を示すと共に、イメージの相手に同情をしてしまうアイラだった。

ある程度時間が経った所で素振りはそこまで、とアリストに終了の

指示を出すアイラ。

少し物足りないような顔をしていたアリストだったが、素振りは基本だからかかさず行うようにと言われ次の訓練にはいることにした。

「さて、今度はあたしの奥義に挑戦してもらおうよ。」

相手はこれでいいかな、と適当な丸太を立てる、そして少しアリストから距離を取り軽快なステップを踏み出す、それはまるで踊りのようであり、思わず「きれい…。」とつぶやくアリスト、それを見たアイラは不敵な笑みを浮かべると。

「これがあたしの得意技、つるぎのまいだ！」

そのまま流れるような足の動きを止めること無く瞬時に攻撃を繰り出す。

ほぼ同時に放たれたかのように見えた剣閃によって丸太は4つに分断される。

更に宙に舞い上がった丸太の1つに体を向けると、武器を両手に握り直し、力強く斬りつける。

ヒュンツ！という高い音が鳴ったかと思うと、丸太だったものはただの木片へと変化していた。

「どうだい、あたしの技は？」

「す、すごい！すごいですアイラさん！」

鼻息荒くボクも使ってみたいです！というアリストへ満足そうに頷くアイラ。

じゃあまずは基本の動きから覚えようか、と説明しはじめる。

アイラはもともと部族に伝わる踊りを代々引き継いでいく家に生まれたらしく、物心ついた時から踊ることを学ばされていた。

しかしそんな生活に嫌気が差し、冒険者となることを夢見ていた彼女はある日決意し部族から逃げ出す。

「父親を殴って飛び出してきちまったよ。」と自嘲気味に言っていたが、アリストは強い共感を覚えたようである。

そうして旅をしている最中にロツク、レイと出会い色々世話になったそうで、つるぎのまいも、「せっかく得意なことがあるんだから活かした方がいい」と三人で編み出した技らしい。

つるぎのまいは名前の通り剣と踊りの融合である。

まずは踊りをベースとしたステップを開始する、この動きは敵の攻撃を回避しやすくなるらしく、みかわしきやくと呼ばれている。

そしてみかわしきやくを使用しながら、「加護」の力を体の各部分に集中させていく。

この時、「加護」の分配具合によって攻撃方法が変わる。

体中にまんべんなく広げた場合はステップを活かした素早い連撃が可能になるし、両腕に集中させた場合は強力な一撃を相手にお見舞いできるといったところである。

両手持ちも使っているのはそういうことさ、と先ほどの疑問に答えるアイラ。

「説明はこんなところかな、さっそくみかわしきやくの練習からやってみようか。」

「はい！」

以下、再びダイジェストによりお送りいたします。

アイラが あらわれた！

アイラは ようすをみている

アリストは ステップをきざみはじめた！

アイラの MPが4さがった！

「ちょ、ちょっと待ちなアリスト！」

「え？なんですか？」

「なんだいそのへんてこな踊りは？しかも見てたら急に力が抜けたんだが…。」

「へんてこって…、とりあえずもう一回やってみますね。」

アイラが あらわれた！



アイラは ようすをみている

アリストは ステップをきざみはじめた！

アイラの MPが6さがった！

「アリスト…。」

「な、なんですか？」

「とりあえず子供向けのお遊戯からはじめようか…。」

「え、ええ！？」

アリストの前途も多難なようである。

おまけ

「ただいまー…、まだ頭がズキズキする…。」

一日目の訓練が終わり家へと帰ってきたウィル。

居間のソファの上にはぐったりとした表情で寝そべっているアイラ。

「アイラさんどうしたんですか？今頃になって二日酔いとか？」

「ああ…おかえりウィル、あたしのことはいいからアリストを元気づけてやってくれないか？」

あんたの部屋にいたと思うからさと言って眼を閉じてしまった。

よくわからないが落ち込んでいるのかと部屋に入ると、隅で体育座りをしてめそめそと泣いているアリスト、心なしか背中には世の中の全ての絶望を背負ってしまったかのような哀愁が漂っている。

「あ、アリスト？どうした？何かあったのか。」

「ウィル…ごめんね、ボクもう君を守ってあげられないかもしれないかもしれない…。」

そう言って再び泣き出すアリスト、いまだに意味がわかっていなかったが、とりあえず彼を慰めはじめるウィルであった。

アリストは ふしぎなおどりを おぼえた！

## 第十一話 訓練風景アリスト編（後書き）

はじめはアイラつながりで流星剣でも使わせようかなと思ったんですがやっぱりこっちにしました。

ちなみに連撃がドラクエ版で両手持ちがFF5版のイメージです。

アリストがこれ以降不思議な踊りを使うことはおそらくないと思いますw

第十二話 ある日、森の中（前書き）

ちよつと長めです。

## 第十二話 ある日、森の中

クライドさんとの戦闘訓練がはじまってから結構な時間が経った。

最初はなげる以外に関しては目も当てられない様な状況だったが、毎日真面目に訓練を行った結果なのか、今ではインターセプターとの連携攻撃の練習の段階まで進んでいた。

これは前も言ったとおりこちらが攻撃を防いでいる間にインターセプターに攻撃をしてもらうというものである。

普段は人に懐かない犬なのだが、お前なら可能だろうと少し優しい目で言ってくれた。

それにしても彼は賢い犬で、俺の手の回らない部分の動きをカバーしてくれるし、こっちの指示には的確に従ってくれる。

もしかしたら人間の言葉を理解しているのかもしれない、そしてなによりもふもふで癒される。

さすがにインターセプターはやるわけにはいかないとクライドさんに言われてしまったため、非常に残念だが俺の癒しはなくなってしまう、が、いつか俺にも相棒となる存在が現れるかもしれない、その時はきつとこの経験が活かされるんだろうと思いついて励んでいる。

さて、そんな日々を過ごしていたある日突如クライドさんが、「今日は実戦を行なってもらおう。」と言い出した。

というのも戦いの技術、基礎的な体力は訓練によってかなりついてきたが、特技を次の段階に進ませるには少々「加護」の力が弱いらしい。

なので魔物と戦いLvを上げ、「加護」の底上げをしてこい、というのである。

してこい、というのは俺一人で行けという意味で、

「ここらの魔物は弱いので訓練を積んだお前なら問題はないだろう、念のためにインターセプターを護衛につける。」

さすがに俺のためとはいえ弱い者いじめをするつもりはないらしく、かくして一人と一匹の初めての実戦がはじまることとなった。

戦うならば必要だと普通の小太刀を一本かり受け、しゅりけんもいくつか手渡された。

防具はさすがに用意出来なかったものでいつもの服、クライドさんに予備の黒装束を着せられそうになったが丁重にお断りした。ちよつと残念そうだった。

怪我をした時用に薬草も何個か持ち準備は万端！

「ではいつてきます！」

「ああ、夕飯までには帰れよ。」

なんだか母さんみたいなことを言うクライドさんに背を向け、インターセプターと共に歩き出す。

俺達の冒険は始まったばかりだ！

場所は変わってここはアリアハンの町から少し行ったところにある森の中、晴れているため木漏れ日が差し込んで良い雰囲気である。

そんな中俺たちは一応周りを警戒しながら相手を探して前へと歩みを進めていく。

ここはもう町の外、いつ魔物が出てきてもおかしくない状況なのだ。

「うーん、なかなかいないなー。」

だがいざ探してみると意外と見つけることが出来ず、森の中をうろうろと歩きまわる。

インターセプターも気が抜けてきたのかクアアツと大きなあくびをしている。

と、いきなりインターセプターの耳がピクツと動き、こちらを一度見ると、ついて来いと言わんばかりに先に走って行ってしまった。

慌てて追いつくと、木の影に隠れて向こうの様子をうかがっていた、俺も静かに覗き込む。

ぴ、  
ぴい…

そこでは5匹ほどのスライムが群れになって、ピンク色のスライム

を攻撃していた。

俺の聞いたのはピンクのスライムの声らしく、遠目に見てもかなり弱っているようだった。

それを見た俺の中に静かな怒りが湧き上がる。

ピンクのスライムなんて聞いたことがない、おそらくそれが原因でいじめられているのだろう。

自分たちとは違う、たったそれだけの理由で異分子を排除しようとする、それは魔物でも人間でも変わらないということか。

「ちょうどいい、あいつらには俺の経験になってもらおう。」

そうつぶやくと、インターセプターに目で合図を送る。このくらいは慣れたものだ。

そして懐のしゅりけんを数個取り出し、しのびあしを発動させ足音を消しながら近づいていく。

全く気づくことのないスライムたち、ある程度の距離に来た所で俺はタカのめを発動、相手を視界に捉え、腕を強化ししゅりけんを投げる。

ドスッ！

見事一体に命中、撃破に成功する。さすがに気づかれ、こちらを向いたがその間にもう一つを投げつけ、二体目を仕留めた。こちらに向かって来る残りを相手にするために俺は小太刀を構える。



顔に向かって飛び掛ってくるスライムの攻撃を落ち着いてかわし、  
カウンターの要領で切り裂くと、真っ二つになるスライム。すごい  
切れ味だな、この小太刀。

四体目も同じような動きで来たため余裕を持って倒す、だがその隙  
を突いて最後の一体が襲いかかってくる、ちっ、後ろか！

迎撃しようと振り向いた所で、どこからか現れたインターセプター  
がスライムに体当たりをかます、木にたたきつけられたスライムは  
そのまま動かなくなった。

「油断した、助かったよインターセプター。」

任せろ！と言わんばかりにウォン！と一声鳴く、全くもって頼りに  
なる護衛だ。

周りの様子をに気を配ってみたが、どうやら他にはもういないらし  
い、するといきなり自分の中に変化が起きたことに気づいた。

言葉にはし辛いがなんというか、自分を守る力が強くなったような  
感覚、きっとこれがLvが上がるということなんだろう。

「っとそうだ、あのスライムは！？」

倒れているピンクのスライムに近づくと、まだ息はしているような  
ので急いで持ってきていた薬草を使う。しばらくすると目を覚まし  
た。

「ぴ、ぴい…、っ！ぴいっ！」

こちらの姿を見るなりその場から逃げ出そうとするスライム、だがまだ体と思うように動かないらしく転んでしまった。

俺はそいつを優しく抱きかかえると、刺激しないよう言葉を重ねた。

「大丈夫、お前をいじめる奴らは今にはいないよ。」

「…ぴい？」

伝わったのかはわからないが、きよろきよろと周りを見回した後と  
りあえずおとなしくはなってくれた。さてこれからどうするかな、  
まだこいつも治りきつてるわけではないし

いったん家に帰ろうか。

そう考えているとインターセプターが急に茂みに向かって吠え出した。小太刀を構え待ち受けているとそこから飛び出してくる大量のスライムたち。

まだこいつのことを諦めていなかったのか！と再び戦闘になるかと思ったら、俺達には目もくれず逃げるように去って行ってしまった。

「な、なんだ？　いったい何が…、っ！！」

茂みの向こう、スライムたちが飛び出して来た先に何かいる！  
インターセプターもそこから目を離さない、俺は抱き抱えていたスライムを少し離れた木の根元に置くと、「動かないでいてくれ。」  
と言い、姿を見せはじめた影に対し身構えた。

ガアアアアアア！

やがてその魔物を捉えた時思わず俺は絶句してしまった。  
熊のような姿に理性を失った目付き、腕力は凄まじく多くの冒険者を蹴散らしてきたと図鑑でみたことのある魔物。

「グリ…ズリー…！」

そこにはグリズリーがいた、なぜ？ここに生息するはずのない魔物じゃないか！？

だが今はそんなことを考えている余裕はない、わかっているのは二つ、こいつはLvが多少上がっただけの俺が倒せるような相手ではないこと、そしてこいつの目が俺達を逃がすつもりなどないと言っていることである。

今まで味わったことない緊張感に体がふるえ、思うように動かせない。

それに気づいたのかはわからないがゆっくりこちらに近づいてくるグリズリー、くそっ！動け動け動け！

そこヘインターセプターがグリズリーに噛み付き注意を逸らしてくれた。

だがグリズリーに吹き飛ばされ体制を崩すインターセプター、やっぱりダメだ。何とかして逃げないと…。

だがどうやって？このスライムを見捨てれば俺たちはおそらく逃げ切れるだろう、逆にこいつを抱えていくとなると俺は手が出せないためインターセプターに頼ることになってしまい、最悪彼を失ってしまうかもしれない。

スライムか、インターセプターか。  
普通に考えればスライムは置いていくのだろう、でもせっかく助けたこいつを今更捨てていくのか？ いじめる奴はいないという言葉を嘘にってしまう気か？

…そんなこと俺にはできない。

いい加減腹をくれウィル、決めたじゃないか、強くなるって、L  
V差なんて関係ないって証明してやるって。

大きく深呼吸をすると大声で叫ぶ、ここで俺がとる選択肢は一つだけだ！

「インターセプター！ 今から街に戻ってクライドさんと呼んできてくれ！ ここは俺が食い止める！」

言うと同時にしゅりけんをグリスリーに投げる、刺さらずダメージにはなっていないがこちらに向き直った。

インターセプターは少し考えていたようだったがウォン！ と一声鳴くとかけ出していった、頼んだぜ…。

「さてと…。」

動くようになった体を確かめるように数回ジャンプすると小太刀を構える。

おそらく今の俺ではまともに攻撃を受けてしまった時点で終了だろう、なので最優先事項は回避、下手に攻撃を加えて怒らせてしまっ

ては元も子もない。

目の強化を行う、相手の動きを見逃すことのないように、幸いにもLvが上がったおかげかいつもより鮮明に見ることができている。

グリズリーが腕を振り上げる、来る！

大振りのパンチを屈むことによってかわす、続いて反対側の腕の攻撃が来るが、後ろに飛ぶことによって回避する、よし、動きが大きいくぶん回避はそこまで難しくはない！

それからとはにかく避け続けた、避ければ避けるほどグリズリーは焦れてきたのか攻撃が単調になり目で追いやすくなっていった。だが俺のスタミナも長くは持たず、少しずつかすり傷が増えはじめていた。

「はあ、はあ、はあ……。まだなのか、インターセプター……。」

「ぴー！」

「何！？」

俺の意識が一瞬それた隙に、あろうことがグリズリーは身動きのとれないスライムの方に向かっていった。

「やめろおー！！！」

俺は思わずグリズリーに向かって突撃していた。

しかしそんな俺を見てグリズリーはニヤリと笑う、しまっ……

振り向きざまに腕で俺を薙ぎ払う、なんとか小太刀の腹で受け止め

るが、衝撃が殺しきれぬわけもなく岩へとたたきつけられる。

「ガハアツ！」

背中を強く打ちつけ呼吸が苦しい、あいつ俺を誘い込むためにわざとスライムを狙うふりをしやがった……！目の前までやってきて腕を振りかぶるグリズリー、さすがにもうどうしようもないな……。

俺が死を覚悟していると突然グリズリーの背中から深紅の刃が生える。

何が起きたんだと考えるまもなく次の瞬間には首を切り落とされ血しぶきをあげて倒れるグリズリー！

その向こう側に見える漆黒の衣装に身を包んだ人物の姿を目に捉えながら俺は意識を失った。

「……は……。」

気がついた俺の視界にはじめに入ってきたのは見知らぬ天井……ではなく自分の部屋の天井だった。

起き上がると自分の体に包帯が巻いてあるのに気づく、結構かすり傷とはいえ怪我はしたからな。

ふと横を見るとピンクのスライムがこれまた全身包帯だらけですやすやと眠っている、よかったこいつも無事だったんだな……。

「あらゝ！ウイル目を覚ましたのねゝ！よかったわゝ。」

部屋に入ってきた母さんはそう言う俺を抱きしめた、正直すごく痛いです。

スライムも目を覚まし、とりあえず居間に来てねゝと言われ、スライムを抱きかかえて居間に向かう。

するとそこにはいつぞやの“反省中”の札をぶら下げたクライドさんが正座で待機していた。

「…目が覚めたか。」

「は、はい。」

「まさかあんな所にグリズリーがいるとは思わなくてな、済まなかった。」

「いえ、俺もそれは予想外でしたし…。」

「だがあそこで自分だけが残るという選択はいただけないな。」

それは、もちろんそうだろう。言ってしまうえば自分から命を投げ出したようなものである。

「が、あの状況であいつ相手にあそこまで戦えたのなら俺も師として鼻が高い、誇っていいぞ。」

と褒めてくれ、次からは気をつけるようになったと言ってくれた。嬉しくてちょっと泣きそうになったが、正座している姿を見ていると引っ込んでしまった。

「それで、なんでその体勢なんですか？もしかして母さんが…？」

「違うわよ、自分へのけじめなんですって、クライド君はまじめよね。」

ちなみに札はせっかくだからと母さんがつけたそうだが、やっぱり半分母さんのせいじゃないか。

「それで、その子はどうするの？」

俺の抱いているスライムに目を向ける母さん、こいつはこいつで「ぴい？」とか言っている。

「こいつ他の魔物からもしじめられていたみたいなんだ。母さんさえ良ければうちに置きたいんだけど…。」

一応お伺いを立ててみる。

「もちろんいいに決まってるわよ！でもちゃんとあなたが世話をするのよ。」

「ああ、わかってる！おい、お前は今日から俺たちの家族だ！」

「ぴい！ぴい！」

言葉がわかるのか嬉しそうに腕の中で跳ねる、そしてぴょんと飛び上がると俺の頭の上にと着地した。



「あらあら似合ってるわね、それで？名前はどつするのかしら？」

母さんがつけてあげましようか」と言う言葉に即座にお断りをする、  
どんな名前を付けられるかわかったもんじゃない。  
でも名前か…、うーん、珍しいピンクのスライムだし体の色からと  
つて…

「モモはどうだろう？」

「モモちゃんね、いいんじゃないかしら？あなたはどつ？」

「ぴい！」

気に入ってくれたのか元気な声を上げる、よし、名前はモモで決定  
だ！

こうして俺の家に新たな家族が増えた。

色々大変な一日だったが、結果的にLvも上げることができたし  
良かったでしょう。

ちなみにグリズリーのぶんの経験はダメージを与えられなかったた  
めカウントされなかった。あのしゅりけんが刺さっていれば…。

おまけ

「ウィル！？その怪我どうしたの！？」

帰ってきたアリストの質問攻めにあい、かくかくしかじかと説明する。

「そうなんだ…あまり無茶なことしないでよね…。で？その頭の上は何？」

俺の頭の上にはモモが乗っている、どうやらお気に入りの場所らしい。

こいつがさっき助けたスライムだよと紹介する、すると目があった一人と一匹は

「ぴい！！」

「む…！」

何やら睨みあっている。どうしたんだお前ら。

「ふん！ぽつと出にウィルは渡さなからね！」

「ぴい！ぴい！」

何やら仲が悪いようだ、仲良くしろよ。

そして俺はお前らのものでは決してないぞ。

モモが なかまになった！

アリストに ライバルが生まれた！

## 第十二話 ある日、森の中（後書き）

戦闘描写、うまく伝わったでしょうか？なにぶん初めてのことでここまで難しいとは…。

そして新キャラ出ました、出してから気づきました、ぴいだけで意思を表すのがすごく大変なことに。

あとピンクではありませんが、エンゼルスライムではないです。あくまで突然変異的な捉え方をお願いします。

### 第十三話 二人の父（前書き）

感想にて「一般の人の最大Lvが60〜70あるのは高すぎる」という指摘をいただき、「高くてLv50」に修正いたしました。

作者の思いつきのみで進んでいくこの小説、次はどんなほころびが出てくるのか。既に取り返しの付かないところまで来ている気もしますが。

今回で修行編は最後です。

### 第十三話 二人の父

やあ！俺ウィル！とうぞくを目指す一人の男の子さ！

今日も師匠のクライドさん指導のもと戦闘の訓練が続いているよ！

え？なんでこんなにうつとうしい話し方をするのかって？

決まっているじゃないか！眼の前の光景から目を背けたいがためだよ！

そう、今俺の視界いっぱい広がるのは本当に一人で投げたの？と問い詰めたくなるような数のしゅりけん、しゅりけん、しゅりけん。

一応刃引きをしているので刺さる心配はないが当たると非常に痛い、万が一股間にヒットしようものなら俺はお婿にいけなくなってしまう。

背筋に寒いものを覚えながらも集中し目の強化、避けるのが不可能と思われるしゅりけんのみを最低限の動きで弾いていく。

「うおおおおおお！」

カキン！カキン！カキン！カキン！カキン！カキン！

手に持つ模擬刀で急所に投げられるしゅりけんをさばきつつ、その他は体と脚を使って回避していく。

ようやく全て対処し終わり一息つく、などという間もなく再び俺に向かって来るしゅりけん達…ってまたかよ！

さっきよりも速度が上がった鉄の塊が俺に襲いかかる。

もう訓練開始から結構な時間が経ったが、ずっとこんな状況が続いている、現実逃避だつてしたくなるだろう…？  
ちよつと遠い目をしながらまた迎撃の準備を始める。

あのグリズリーとの戦闘のあと大事をとってしばらくは休養していたが、傷も完治したため訓練を再開することになった。

ちなみになぜあそこにグリズリーがいたのかは未だにわかっておらず、クライドさんとアイラさんが調査に行ったが他の個体は見つからなかったようである。

そして改めて防御技術の大切さを思い知らされた俺は、クライドさんに頼んでそちらを重点的に鍛えてもらえようにしてもらった。  
敵の動きを見切り、隙を突いて倒すカウンター主体の戦闘方法を本格的に習うことにしたのである。

あとそれとは別にクライドさんの勧めによつて、モモとの連携攻撃の訓練もはじめた。

あれだけ懐いているのなら意思の疎通は簡単だろうから試してみてもどうかと言われ、モモにも聞いてみたところやる気満々な様子だったのでお願いすることにした。

最初はお互いに気を使つてしまい動きもぎこちなかったが、どうやらモモはこちらの言葉を理解しているらしく、今ではかなりスムーズな連携をすることができている。

そろそろ俺たち専用の合体技でも考えようかなどとモモと話し合つたりしているくらいだ。

余談だがモモとの訓練をはじめた頃、インターセプターが拗ねてし

まったことがある。

どうやらかまってもらえなくなったことが面白くなかったようで、お詫びの意味も込めて全身を撫でくりまわしてやったら許してくれた。

最近ではモモとも仲良くやっているようで、今も背中にモモをのせて楽しそうに走り回っている。

そして現在はクライドさんとの模擬戦の真っ最中、様子見なのかひたすら遠距離で攻撃してくる。ただしどこから来るかはわからない、一瞬たりとも気を抜くことはできないのである。

飛んでくるしゅりけんをかわしきると、またもや俺に降り注ぐしゅりけん弾幕。

「だが見える！ 私にも鉄が見えるぞ！」

目が慣れてきたのか随分と遅く感じるしゅりけんを軽くさばく、さあ次はどこからだ！

「戦闘の最中に随分余裕だな。」

その言葉と共に突然現れるクライドさん、しまった！今のしゅりけんはおとりか！

右手に逆手に持った模擬刀を水平に薙いでくる、なんとか反応が間に合った俺は手に持つ模擬刀でいなす。

この模擬刀もちろん刃引きをしているので殺傷能力はないが、殴

られればもちろん痛い。

万が一股間にヒットしようものなら俺はお嫁にいけなくなってしまう。

そこからは右、左、上、下、斜めと連撃のオンパレード、防戦一方の俺は防ぐしかない。

なんとかくわらずに済んでいるのは日々の訓練の成果なのか、クライドさんが手加減をしているからか。おそらくは後者だろうが。

「どうした？ 守っているだけでは終わらんぞ？」

「くっ、わかってますよ！」

そう思うなら少しは攻撃の手を緩めてくれ！

ええいこうなったらヤケだ！ せめて一撃くらいいいれてやる！

攻撃と攻撃の間のわずかな隙を利用して後ろに下がり距離を取り、クライドさんが一瞬硬直したところにすかさず突っ込む、そこだ！ 渾身の力を込めて模擬刀を振るう、回避が間に合わなかったのか動きの取れないクライドさんに攻撃が直撃する。

やった！ と思ったら手応えが全くなぐにゃあと姿がぶれて消える。

「残像だ。」

後ろから聞こえた声に反応する間もなく首につきつけられる模擬刀し、質量を持った残像だ……？

身動きのとれなくなつた俺は両手を上げ模擬刀を手から離すと、



「参りました。」

そう言つて模擬戦は終了した。今回も勝てなかったー！

「グリズリー戦の話聞いたときにも思ったが、お前はどうかやら搦め手に弱いようだな。」

今は先程の模擬戦の反省をしているところである。

「真正面から行つばかりが戦いではない、それはもちろん敵にも味方にも言えることだからな。注意することだ。」

つまりクライドさんの言いたいことはこういうことである。

俺は正攻法以外での戦い、グリズリー戦で言えばグリズリーがモモをおとりにしたような方法に翻弄されやすいらしい。さっきの模擬戦でも遅くなつたしゆりけんに違和感を感じることができていれば、冷静に対処しその後の結果も変わっていたかもしれない。

特に俺のような卑怯と取られても仕方がない戦いをする奴もいるかな…と自嘲気味に語るクライドさん。それに対し俺は、

「そんな事ありませんよ！俺はクライドさんの戦い方尊敬してます！敵の隙について確実に倒す、それは卑怯でもなんでもないです！」

自分に自信を持ってください！と少し生意気なことを言ってしまったが、「そうか…。」と言つてそっぽを向いてしまった。もしかして照れてる？

最後に、あの連撃の中距離をとれたのは少々意外だった、それに関しては褒めてやるとぼそつと言って反省会は終わった。

現在は休憩中、俺とクライドさんは丸太の上に座っている。

今日も天気はよく、ぽかぽかとした陽気の中緑の芝生の上をモモとインターセプターがはしゃぎまわっている。

「それにしても…。」

「え？」

クライドさんが急に語りだす。

「よく俺のような者の訓練に今までついてきたな。」

何を言うのかと思えばそんなことが。

「そりゃあもちろん初めは不安でいっぱいでしたけどね、でも父さんの知り合いなら悪い人ではないだろうし、何よりクライドさんが俺のために色々してくれているのを知ってますから。」

そう、しゅりけんの時に使った人型もそうだが、本来なら大事な武器であるはずの小太刀やしゅりけんを訓練用に刃引きするなど、俺が強くなれるよう考えていてくれたのを知っている。

「依頼とはいえあいつの息子を危険な目に合わせる訳にはいかないからな。」

一度怪我はさせてしまったが、と少し申し訳なさそうに言う。  
まただ、普段訓練中は厳しいクライドさんだが、時々ものすごく優しい目をすることがある。

それは父さんが俺に向ける視線と似ていて、もしかしたら誰かに俺を重ねているのかもしれない、だから…

「そんなことは気にしないでください、それに父さんが二人できたみたいで俺も楽しいですよ。」

心からの言葉を伝える。あなたに出会えてよかったと、あなたが師であることを誇りに思うと。

驚いたように目を見開いた後、少し目を細めるクライドさん、表情は見えないがきつと笑っているのだろう。

ゆっくりと手を伸ばし俺の頭の上に持つてくる、そしてその手が頭に触れるか触れないかというところまで来た、のだが。

「おっと、そこまでだ！」

いきなり誰かの声が響き手を引いてしまうクライドさん、見上げると逆光で見えないが木の枝になにやら黒い影が立っている。

そしてその影はどうっ！と言うと飛び上がり俺達の前に着地する。

「様々な経験をした俺が鮮やかに帰還！」

青いバンダナがトレードマークの我が父ロックその人であった。

「と、父さん！」

「おう、ウィル！今帰ったぞ！そしてクライド！ウィルは俺の息子だ！お前には渡さんぞ！」

ズビシッ！と指を突きつけて宣言する父さん、ちょっとは空気読もうよ…

「ロツク…！貴様、相当痛い目にあいたらしいな…！」

「お、やるか！どこからでもかかってこい！」

そう言つて武器を構えて対峙する二人、クライドさん、それっていちげきのやいばじゃ…

戦いを遠巻きに見ながら先ほどのことを思い出す、直接手が触れることはなかったけど、でもさっきは確かにクライドさんの優しさに触れた気がする。そう感じるだけで嬉しくなってしまう自分がいて、頬が緩んでしまうのを止められなかった。

そういえばアリストはどうなったかな…

side アリスト

やあ！ボクアリスト！魔法剣士を目指す一人の恋する男の子さ！今日も師匠のアイラさん指導のもと戦闘の訓練が続けているよ！

え？どこかで聞いたことのある話し方だって？

そんな事言われても知らないよ！え？じゃあなんでこんなにうつと  
うしい話し方をするのかって？

決まっているじゃないか！眼の前の光景から目を背けたいがためだ  
よ！

「そらそらそらそらそら！！」

眼の前には好戦的な笑みを浮かべながらつるぎのまいを繰り出すア  
イラさん。

初めて見た時よりもずっと速いその連撃が今まさにボクに襲いかか  
ろうとしている。

あの事件から基礎のステップがまずなっていないということで初歩  
の初歩から始めることになったボク。

それからは来る日も来る日も子供のお遊戯用の踊りを踊り続ける日  
々。

ウィルにそっちの調子はどうなんだと聞かれるたびに、い、今はま  
だ基本かなと答えるのがどれだけ気まずかったことか！

アイラさんはアイラさんでボクの踊りを見るたびに力が抜けてしま  
うとかいって訓練どころじゃなかったし…。

でもようやくその現象も起きなくなってきたということ、やっと  
模擬戦を開始することになった。

これでやっとウィルに追いつける！最近はあるのピンクの生き物との  
連携も訓練してるって言ってたし、遅れは取ってられないんだ！

だから気合を入れていこう！と思ってたんだけど…。

「ふふふ、今までよくもやってくれたねえ！」

まるで親の敵を見つけた時のような嬉々とした表情で迫るアイラさん、だいぶストレスが溜まってたみたい。  
ぼ、ボクが悪いの！？と言っても問答無用で模擬戦が開始され、今に至る。

「ほらほらあ！まだまだ行くよお！」

凄まじい勢いで繰り出される攻撃をかるうじて受け流す、でも全く止むことのない追撃の嵐。

そしてとうとうはじき飛ばされるボクの剣、視界には剣を両手に握り直す動作をしている赤鬼。

ああ…この状況なんて言ったらいいんだろう…？え？詰む？なるほど、いい表現だね！うん、ボク詰んだ！

どこからか聞こえた声に相槌を打ちながら、アイラさんに吹き飛ばされるボクでした…。

おまけ

「ふふふ、クライド！俺の新しい技を見せてやる！これを見ろ！」

「そ、それは…、まさか！」

「そうだ！今回の冒険で手に入れたげんじのこて！これで俺は幻の

「二刀流！さあ、いくぜクライド！」

「…貴様、武器は二本持っているのか？」

「え？…あ。」

「…。」

「…。」

「…ふん！」

「（ドゴォー！）ブルアアアア！」

「これは俺がもらっつ。」

「…父さん…。」

クライドは げんじのこてを 手にいれた！

### 第十三話 二人の父（後書き）

今更ですけどヒロインいないですね、男の娘と人外が候補になつてますけどw

一応出す予定はあるんですけど現時点ではかなり後になって出て来空気になりそうな予感が…

さてなんとか毎日更新を続けてきましたが、次回からは少し忙しくなるため不定期になると思います。

思い出した時にでもチェックしていただけると嬉しいです。



## 第十四話 旅立ちの決意（前書き）

やっぱり第〱話じゃ寂しいですかね？

サブタイトルをちゃんとつけようか考え中。

今回は流石に話が進みます、ちょっとだけですが。

## 第十四話 旅立ちの決意

あれから一年の月日が経った。

結構前の話にはなるが、戦い方もある程度は形になってきたしそろそろ自分の旅を再開したいということでクライドさんとは別れている。

「次に会う時までにはどれだけ強くなっているか楽しみにしている。」

そう言つて饑別に小太刀としゅりけんをくれた。

母さんに「世話になった。」と告げ、「俺は！？ねえ俺は！？」とうるさい父さんを一発殴つて旅立つていくクライドさん。

いつか来るとはわかつてはいたがやはり別れは辛いもので、せめてもと去っていく背中が見えなくなるまで見送り続けた。

モモもインターセプターがいなくなつて寂しくなつてしまったのか、しばらくの間は少し元気がなかった。

それと、ほぼ同じ時期にアイラさんも旅立っている。

こちらもありストへの指導が一区切りついたので、気ままな放浪生活に戻ることだった。別れるのが嫌だったのか、行かないでください！とアイラさんに泣きついていたアリスト。

きつとあいつにとつても初めての師匠で今では特別な存在なんだろう、もしかしたら好きなのか？とも思つたのだが、その日の夜に母さんが「じゃあ今日は盛大にいかないとね。」と言つてはじまつた大宴会に強制的に参加させられ、翌日アイラさんが出発する時には「もうしばらく来ないでください…。」とげんなりとしていたと

ころを見るに恋愛感情はなさそうだ。

ちなみに父さんは隠れていたのだが、バンダナが隠れた隙間からはみ出していたせいで見つかり連行されていた。

俺？俺はモモと一緒に遊んでたよ？もふもふもいいけどぶにぶにもいいよねー。

二人がいなくなった後は、来る前と同じような状態になった。  
父さんから技術、母さんから知識を学ぶ生活に戻ったのである。

俺については今から戦闘方法を父さんのやり方にするのは時間がかかるし、変な癖がついても困るのでそのままいくことになった。  
はじめは「やつぱり俺が教えればよかった！」と悔しそうにしていたのだが、それはそれということで現在はぶんどるの練習をしている。

モモとの連携の訓練も継続中で、最近では声に出さなくても目だけで通じ合えるようになってきた。

ただ専用技に関しては難航している。と言うのも基本的にモモは体当たりしかできない、これでは俺が防ぐ　モモが攻撃以上の発展のしようがないのだ。

一応四十八のボディアタック（全て俺命名）は開発したが、アリストに「結局全部ただの体当たりじゃない。」と言われ落ち込んでしまった。

俺があまりいじめないでやってくれと注意すると、今度はアリストが拗ねてしまった。何なんだお前は。

そのアリストだが、こちらで戦闘方法はアイラさんに教えてもらったやり方を続けているらしい。らしい、というのは実は俺はほとんどアリストの訓練を見たことがないからである。

一度あいつを迎えに行った時にちらつと見ることはできたのだが、そこにいたのは何やら重苦しい雰囲気の中、木の剣を片手に謎の踊りを踊り続ける親友。

しばらくした後がつくりと膝をつき、「やっぱり一人じゃ無理だよお…。」と弱音をはいていた。

そこで目があってしまい、「み、見たの！？ねえ！？」と鬼気迫る顔で詰め寄られ、思わず今来たところだと嘘をついてしまった俺は悪くない。

そんな彼は最近母さんの奥義、ボムを習得すべく燃える水の制作をしている。

かなり危険なもので作成する際は例の地下室を使用している。日に何度も爆発音が響き、夕方になる頃には所々が焦げたアリストにこにこ笑顔の母さんが出てくる。

なぜ母さんが無傷なのかはもう気にしないことにした。

メラはまほうつかいにならないと覚えられないため、実際の発動訓練は十六歳になってからになる。まほうつかいはメラをLv1から使えるので、なったらすぐにはじめましょうと母さんが言っていた。

そうそう、Lvといえば一度ピクニックがてら四人と一匹で近くの森に魔物狩りに行ったことがあった。俺としては少しトラウマがあ

ったが、父さんと母さんがいるしよっぽどのことがない限りは平気だろうということで参加した。

というかピクニックがてら魔物狩りって…改めて考えるとすごいことしてるな、俺たち。

ともかくその時のこともあって俺とアリストのLvは3まで上がっている。

それじゃあメラは覚えられないじゃないかと思うかもしれないがその心配は無用で、しょくぎょうを決めた時点でLvに応じた「加護」がその場で付加されるらしく、呪文も使えるようになるそうだ。

言われてみれば村人AがLv80になった後まほうつかいになりました、でもメラさえ使えません！では悲しすぎるしな、その魔法使いなら肉弾戦だけでも強そうだが。

とにかくそういうことなのでLvは安心して上げていいようだ、神様も色々考えているんだなあ。相変わらず俺は嫌いだけど。

そんなこんなで充実した毎日を過ごしている俺だが、最近少し考えるようになってきたことがある。

それは「強くなって一体どうしたいのか？」ということだ。

おそらく俺は既に年齢から見ればかなり強い部類に入っている、なら目標は達成しているのでは？

強くなれることを証明するために強くなる、今まではそのために努力してきた、でもその先はどうすればいい？

成果としていじめた奴らへ仕返しをする？そんなのは人間以下のことだ。

父さんたちのように旅をする？悪くはないが、自分の最大Lvを考えるとやはり何か目的は欲しい。

でも別に現在の生活に不満はない、家族がいて、友達がいて、この平穏がずっと続けばいいと思っっている。

ならばもういいんじゃないか？強くなることはやめて普通の村人として生きていっても。

しかし体に染み付いた習慣は簡単には抜けず、訓練に励む。そんな日々が続いていた。

そして今日もそんなことを思いながらいつもの訓練場に足を運ぶ。いつもと同じ場所、同じ風景、でもいつもと違う部分があった。

本来なら別の場所で訓練している親友、アリストが神妙な面持ちで立っていたのだ。

普段とうってかわって真面目な表情のアリストになんと声をかけようか迷っていると。

「待っていたよ、ウィル。」

先に話しかけてきた。どうやら俺を待っていたらしく、伝えたいことがあるらしい。

一体なんだろうと次の言葉を待っていたのだがなかなか切り出せないらしく、顔を上げたり俯かせたりしている。しばらくはそうしていたが、とうとう決心をしたのかようやく口を開くアリスト、その言葉は俺を驚愕させるのに十分な一言だった。

「ボクと、一緒に、世界の平和を守る旅に出て欲しいんだ。」

「…へ？」

思わず気の抜けた返事をしてしまう俺、今なんて言った？  
旅に出る？何のため？世界を守るため？

全く事態についていけない俺にアリストは語りだした。

昨日夢を見たこと、そこで「すべてをつかさどる者」と名乗る存在に出会ったこと。

更には自分が勇者であると告げられたこと、そして世界の平和を守ってほしいと頼まれたこと。

「ゆうしやである証拠を見せるね…メラ！」

指先から放たれる小さな火の玉、間違いなく火炎系呪文のメラであった。

しよくぎょうを選ぶ前なのに使用できるということは確かに何よりの証明だろう。

「改めて言うね。ウィル、ボクと一緒に来て欲しい、ボクには君が必要なんだ！」

真剣な顔で俺に訴えかけるアリスト、こいつが嘘を言っていないくて本気で俺を頼ってくれているのはわかる、長い付き合いだしな。でも俺は…。

「駄目だよアリスト、俺じゃあ足手まといにしかない…。」

世界を守る、つまりそれは必然的に戦いの日々になるだろう。はじめのうちはいいい、技術と知識でなんとかなるかもしれない、でもいつか必ずそれだけでは太刀打ち出来ない状況が出てくる。

そこで重要になるのはやはり「加護」だ。だからいつか俺は役に立たなくなる、それがなにより心苦しい。だから断ろうとした、でも、

「そんなことない！足手まといになんてならないしさせたりはしない！ボクは君が、ウィルがいないと駄目なんだ！」

俺の目を真っ直ぐ見つめながらそう叫ぶアリスト、それにね…と続く、

「すべてをつかさどる者が言ってた、ウィルの最大Lvが低いのに理由があるんだって、きっとそれは旅の中で見つけることができるだろうって。だからさ、それも一緒に探しに行こう？二人で。」

まさか俺にも秘密があったとは、気になることはなるがでもそれよりもずっと胸に響いたアリストの言葉。

他の誰でもない、俺を必要としてくれている、その事実が胸が熱くなる。

もしかしたら途中で離脱することになるかもしれない、最悪の場合死んでしまうかもしれない。

だがここまで言われて逃げるわけにもいかない、ならば道はひとつ、覚悟を決めようじゃないか！

「わかった…、アリスト、お前と一緒に行く。俺の力で良かったらお前の助けになる、約束するよ。」



その言葉に小さく「よしっ！」と言ったあとありがとう！と俺に抱きついてくるアリスト。

最初の間が微妙に気になったが喜んでくれてよかった。

強くなることへの理由をくれた親友に感謝を。恩返し、というには大きすぎる気もするが世界を平和にする手伝いを、そして俺の秘密を知るために頑張るとしますか！

旅立ちの数ヶ月後に迫ったアリストの十六歳の誕生日、その日に王様に旅立ちの許可をもらうことになっているそうだ。  
俺？俺はその少し前に十六歳になるから先に許可だけもらっておくよ。

「さーて、そうと決まったら父さんと母さんにも言わないとなー。」

「えー？も、もうご挨拶に！？まだちょっと早いと思うよ？」

「そうか？旅立ちの準備なんだから早いほうがいいだろ？」

「あ、じゅ、準備ね！うん！それなら早速行こうよ！」

焦った様子で俺の手を引いていくアリスト、なんか変なこと言っただろうか？

考えてもわかるはずもなく、俺は家へと向かうのであった。

おまけ

「という訳で旅立つことを許してください!」

「もちろんいいぞ!お前の好きなようにやってこい!」

「疲れたらいつでも帰ってくるのよ、ここはあなたの家なんだから。」

「アリストもウィルのことを頼むぞ!結構無茶するからなこいつは。」

「はい!ウィルのことは全てボクにまかせてください!」

「色々と準備もしなくちゃね。」

「旅なんてはじめてだからちょっとワクワクするな。」

「うん、楽しみだね!」

「そういえばアリストちゃん、メラ使えるようになったんですって?時間も限られてるし今から練習はじめましょうか。」

「え!?!いや、まだ使いこなしてないんで今日のところは...。」

「まあまあそう言わずに、さあいらっしやい。」

「ちょ、ちょっと!ウィル!ロックさん!助けて!」

「ほーらモモ、おやつの時間だぞ!」

「ぴい！ぴい！」

「お、うまそうだな！俺にも一つもらっぞー！」

「父さんそれも用のおやつだよ…。」

「なに和やかな会話してるのさ！っ、っらざりものー！」

「っふっふ。」

アリストは ボムを おぼえた！

#### 第十四話 旅立ちの決意（後書き）

実際は世界の平和を守って欲しいとは言っていないんですが、次につなげたいのでそういうことにしました。

そして途中難しくて出すのを断念してしまった、ごめんモモ…。

## 第十五話 夢の真相（前書き）

ちよつとしたキャラ崩壊が起きます。ご注意ください。

今回かなり読みづらと思います、どう書いていいかわからなかったもので…。

そして何度でも言います、作者はこの話を重くしようとは考えていません！

それではどうぞ。

## 第十五話 夢の真相

side アリスト

「今日も一日疲れたなー。」

今ボクは自分の家の自分の部屋の中。

いつものように訓練をして、ウィルの家でご飯をご馳走になって、家に戻ってモモのぬいぐるみ（自作）を相手に立ち回りの練習をして、ウィルのぬいぐるみ（自作）を抱きしめながら眠りにつく。

そんな何気ない毎日の終わりを迎えようとしている。

そろそろ寝ようかなとぼふん！とベッドの上に飛び込み、仰向けに寝転がりながら今日起きたことを振り返る。

今日はせっかく二人きりでお昼でも食べようとレイさんに教えてもらってお弁当作ってきたのに…。

あのピンクのスライムにまた邪魔をされてしまった。

モモはいつもウィルの頭の上からボクのしよとすることを妨害してくる、ボクだってウィルの頭の上に乗りたいのにずるい！

例の如くギャーギャーぴいぴいと騒ぎ出す一人と一匹、そしてそれを喧嘩両成敗と拳で止めるウィル。うう…ボクは悪くないのに…。

でもその後はおいしいうちで言いながらお弁当を食べてくれた。

勇気を出して「あーん。」ってやったんだけど上にいたモモに食べられてしまった、あの魔物めえ…。

うつ伏せになりながら振り返す怒りに身が震える、いつか仕返しし

てやるー！

復讐の計画をあれこれ練っていたボクだったが、ふと数年来の付き合いになる彼の顔を思い出し、顔をにやけさせる。

最近のウィルはどんどん格好良くなっていってる。

昼にお弁当を食べて「おいしいよ。」と言ってこちらに笑ってくれた顔を見た時は思わず気絶しそうになったほどだ。

この笑顔を知っているのはウィルの家族とごくわずかの人だけ、そのわずかに自分が入っているのがたまらなく嬉しい、だけど…。

「いつかきつと、そうじゃなくなるんだよね…。」

顔を枕にうずめながら一人つぶやく。

そう、いつか彼にも好きな人ができる、というか女の子が放つては置かないだろう、頭が良くて、いつでも前向きで、誰にでも優しい彼なんだから。

そしていつかはその好きになった誰かと一緒になる。それによってボクとの仲が変わることはないだろう、どんなことがあっても二人は親友なんだから。

でも自分が一番望む場所にはいられない、彼の一番近い場所にはいられない、そんなのは当たり前だ、それはあつてはいけないことなんだから。そう思っても割り切れずに胸が苦しくなる。

そのいつかがいつまでも来なければいいのに、ウィルと、そのご家族と、モモといつまでも楽しく過ごせたらいいのに。

ずっと前から抱えている、そんなもやもやした気持ちを抱えたまま、いつの間にかボクは眠りについていた。

「ん、んん…？」

気がつくとボクは自分のベッドではなく知らない地面の上に寝ていた。

周りは森なのか木が所狭しと生い茂っている、その中にポツカリとまるで部屋のように空間があつて、そこで目を覚ました。

「ここは？」

むくりと起き上がると思わず独り言をつぶやく。

ああ、これは夢だなと気づくのにそう時間はかからず、夢にしては随分と意識がはつきりしてるなどと考えていた。

とりあえずぐるりとあたりを見回してみる。随分と奥地にあるのか木々の向こうにあるはずの景色は全く見えない、が、まるでボクを待っているかのように一本の道が伸びていた。

「まあ、どうせ夢だしちょっと行ってみようか。」

光が差し込んでいる道を真っ直ぐ進んでいく。

しばらくは森が続いていたが、突然景色が変わった。

細い崖の上にボクはいつの間にか立っていた、その先には大きな山が広がり、頂上からは滝のように水が流れ落ちている。と言うか滝だ。

さすがは夢だ、何でもありだなーなんて思いつつ景色を見ようと崖



の先まで歩いて行く、するとどこからともなく声が聞こえ出した。聞こえ出したと言うよりは頭の中に響いてきたという方が正しいかもしれない、それはすごく綺麗な声で。

アリスト… アリスト…

私の声が聞こえますね…。

いきなり名前を呼ばれて少し驚いたが、聞こえてはいたのはい、と答えておいた。  
すると不思議な声は再び響きだす。

私はすべてをつかさどる者。  
あなたはやがて真の勇者として  
私の前にあらわれることでしょう…

しかしその前にこの私に  
おしえてほしいのです。  
あなたがどういう人なのかを…

さあ 私の質問に正直に答えるのです  
用意はいいですか？

一気にまくし立てられ流されてしまふところだったが、慌ててボクは言う。

「ちょ、ちょっと待ってください!」

はい？もしかしましたか？わからないことでも？

「どうかしましたか？じゃないでしょ！わからない事だらけですよ！」

そうですか、では何を知りたいのですか？

「とりあえずボクが勇者っていうのはどういことですか！？」

言葉のとおりです。

あなたは勇者として魔物たちの王を倒し  
世界を平和へと導くのです。

「そんな…なぜ、なぜボクなんですか？アイラさんやクライドさん  
みたいにボクより強い人はいっぱいいます。なのになぜ！」

…その者たちがどれほどの強さかは私にはわかりません。  
でもその者たちには決して魔王を倒すことはできません。

「え？どうして…？」

例えば彼らに魔王を倒す気があるかを聞いてみてくださ  
い。

きっと何かしら理由をつけてそんな気はないと答えるは  
ずです。

…なぜなら選ばれし者ではないから。

「選ばれし…者…？」



さ、さあ！この話はここまでにして！  
そろそろ私の質問に答えてくれますね？

「嫌です！」

な、なぜですか！

ちゃんとあなたの疑問に答えたのに！

「あんなこと言われて納得するわけ無いでしょう！それにボクはウィルと平穏に暮らしたいんです！」

ウィル…と言うと

あの「加護」の力が弱い少年のことでしょうか？

「そうです、ボクは彼とずっと一緒にいらればそれだけでいいんです。」

ではその彼と旅に出ては？

「別に旅に出ても出なくても離れることはないし、それに魔王なんてどうでもいい。」

どうでもいいって…

そ、そうだ！その者の「加護」を弱くした理由もちゃんとありますよ！

旅に出ればそれもわかるはずですよ！どうですか？

「理由…ウィルのもなにか理由が…」というかあなたがやったことなんですか…？あなたのせいでウィルは小さい頃から苦労してきたっていうんですか…？」

アリストの雰囲気が変わった。目からは色が消え、背後から黒いオーラを吹き出し、怒りに震えた声で言う。

ここにウィルとロックがいたら口をそろえて言ったであろう、「母さん（レイ）そっくりだ…。」

さすがにすべてをつかさどる者も恐怖したらしく

ヒイ！い、いえ、それはそうなんですけどちゃんと理由がありましたね？

「じゃあ今すぐ教えて下さいよ…？もったいぶる必要なんて無いでしょう…？」

…それは私の口から言うことはできません。

あなたの、あなた方の目で、耳で、足で見つけてください。

譲れない部分があるのか真面目な態度で答える。

そうまで言われては引き下がるしかない、気持ちを落ち着けるアリストだった。

ほっと息を吐いた後、すべてをつかさどる者は話しだした。

再び聞きます

魔王を倒し、世界を平和へと導いてはいただけないでし

ようか？

「嫌です。」

…どうしてもですか？

彼の秘密がわかると言っても？

「はい、ボクの気持ちは変わりません。」

そうですか…

ならば仕方ありません、私も最後の手段に出しましょう。

「何を言ってもボクの意味は…」

あなたはそのウィルという少年に恋心を抱いていますね？  
でもそれは決して叶わぬ恋、違いますか？

「…っ！それはっ！そうです。」

そう、それは本来実ってはいけない思い  
諦める以外の選択肢はありません。

ですがもしあなたが世界に平和をもたらしてくれるのなら  
私の力であなたを女の子にしてあげましょう！

「え…？おん…なのこ？」

そうです！

それならあなたの恋はもはや叶わぬものでもなんでもない

むしろ最も距離の近い存在

一番の本命になることができるのです！

「ということ、朝布団の中で寝ぼけるウィルにおはよふのキスで  
爽やかに目覚めてもらった後用意しておいた朝食にやっぱりお前の  
作る料理は最高だな！って言って頭を撫でてもらって仕事に向かう

彼と玄関先で行ってらっしゃいのキスをして昼は手作りのお弁当を仕事場に持って行ったら周りの人達にあいつらはいつでも熱いな！なんて温かい目で見られて夕方帰ってきたらお帰りなさいのキスをして二人で夕食を作ってお互いに食べさせあった後お風呂に一緒に入って背中やその他もろもろの部分洗いっこして寝るまでの時間を二人寄り添って過ごして夜は同じベッドに入ってお休みなさいのキスをしたらウィルが色々と耐えられなくなってお休みどころか昨夜はお楽しみでしたね状態になるっていうボクの夢が叶うってこと！？」

……………え、ええ、そう、ですね。

と言うかキス多いですね…そんなにしたかったんですか？

それでどうでしょう？

私の願い、聞いていただけますか？

「わかりました…ボクやります！必ず世界を平和に見せます！そして…うへへ…」

そこまで彼と一緒にいたいとは…

どうやらあなたはかなりのさびしがりやのようですね…。

こほん！

で、ではよろしくお願いします。

あなたたちに精霊の守りがあらんことを…。

そうしてボクはしょくぎょう「ゆうしゃ」として旅立つことを決意

した。

もちろんウィルも一緒に、結構迷ってたみたいだけど、色々と説明したら了承してくれた、大事なところは伏せたけど。

魔王を倒すと同時にウィルに告白する。

お前男だろ！？とウィルが驚く。

ううん、ボク女の子になったんだよ！と事情を説明する。

そうか、それならなんの問題もないな！と見事二人は結ばれる。

新婚旅行はジパングにしよう！

この完璧な計画を成功させるにはウィルがついてきてくれることが絶対条件だからね…。

思わず「よし！」って心の声が出ちゃったけどバレてはいないだろう。

ロックさんとレイさんの許可ももらえだし、夢を叶えるためにこれからがんばるぞー！

ふう、まさかあそこまでとは…

人選、間違ったのでしょうか…

すべてをつかさどる者は人知れずため息を漏らしたのであった。



## 第十五話 夢の真相（後書き）

後書き

何点か補足をさせていただきます。

勇者について

選ばれし者たち以外は魔王を倒せないのではなく、魔王を倒す気にならないという超理論で行きます。

でないと強い人いっぱいいるんで、この小説。

もちろんアイラやクライドもアリストにお願いされればその気になります、そんな予定は全くありませんが。

ロトの血筋はこの際無視して、勇気を持つて行動するものがロトと呼ばれる説を採用します、アリストの動機は不純ですが。

デイン系はしょくぎょうがゆうしゃだから使えるんだ。

だからうちのオルテガさんやサイモンさんは使えないんだ、きっとそうなんだ。

アリストについて

これは割と前から考えていました。

「勇者だから」魔王を倒しに行く、それではやる気がでない！

自分の欲望に忠実な勇者がいてもいいじゃないか、それなら他人の家のタンスから勝手に物を持ち出して行くのだったためらいなく行えるはず！

そんな感じで男の娘 娘になるためにアリストは頑張ります。

完璧な計画はウィルが受け入れてくれるかわからないことや、そもそも魔王を倒さなければいけないということで穴だらけです。

でも恋する乙女（？）は強いんです。

選んだ理由については…もう、そのまんまです。すべてをつかさど

る者が説明したとおりです。

それにしてもルビス様ならともかくほこらの精霊さんに  
そこまでの力と権限はあるのでしょうか？

今頃作者と共に不安でいっぱいには違いありません。

最大Lvについて

あくまで最大Lvはその人の限界、という設定なので今のLvとい  
うわけではないです。

ロックももちろんLv96ではないです。

こんなところでしょうか？

次回新たな仲間が増えて、いよいよ旅立ちです。

思い出す意味も込めてゲームをプレイしながら書こうとはじめたの  
ですが、ここまで長引くとは、ゲームもまだレーベの村で止まっ  
てます。

それでは長々と申し訳ありませんでしたが、この辺で。

## 第十六話 別れと出会い（前書き）

前回の話は携帯で読んでくださっている方には非常に優しくない書き方だと自分で見て知りました。いつか直します。

今回はこころ場面変わります。

## 第十六話 別れと出会い

ぴいぴいぴいぴい！ぴいぴいぴいぴい！

耳元で鳴る大きな音に目を覚ます。

寝ぼけ眼をこすりながら起きるとすっかり家族の一員となったピンクの塊が目に入る。

「ふああ…、おはようモモ。」

「ぴい！」

毎日決まった時間になったらちゃんと俺を起こしてくれる、名付けて目覚ましモモ。

え？センスがないって？俺の母親を誰だと思ってるんだ。

朝の挨拶をかわし、そのまま俺の頭の上に乗っかってくるモモ。

本当は寝ぐせがついているから勘弁して欲しいのだが、以前やめるように言った時はひどく悲しそうな表情でこちらをずっと見つめ続けてきたので、それ以降触れないことにしている。

ググつと一旦体を伸ばし体も覚醒させる。

ゆっくりと息を吸い込み、同じくゆっくり息を吐き出すと、いつものように居間へと向かった。

部屋から出るといい匂いが漂ってくる。

食卓には既にいくつかの料理が並べられており、それを作っている母さんがこちらを見ると声をかけてきた。

「おはようウィル、早速で悪いけどパパを起こしてきてくれる？」

「おはよう母さん、父さんは相変わらず起きられないんだね。」

これもいつものことだなーと思いつつ父さんのいる部屋へと向かう。

「この魔石、ヒビが入ってる…、むにゃ…。」

ベッドの上には謎の寝言をつぶやく父。

きっとこの人は夢の中でも冒険しているに違いない、まずは普通に起こしてみる。

声をかける…起きない。もっと大きな声にする…起きない。揺さぶってみる…起きない。

とうぞくって気配とかに敏感なんじゃないのか？まあいい、これでも駄目なら…。

「モモ！君に決めた！」

ぴいっ！と俺の頭の上から父さんの顔の上に飛び乗るモモ、鼻と口を塞がれ、次第に体中をじたばたさせる父さん。と、次の瞬間。

「ぶはあっ！な、なにがあった!？」

驚いた顔で目を覚ます父さん。

これぞ目覚ましモモ強制版、使う相手を選ぶので滅多に表にはでないが。

一仕事終えたと言わんばかりに頭の上に戻ってくるモモ。

「あ、起きた。おはよう父さん、朝だよ。モモもお疲れさん。」

頭をポンポンと軽く撫でてやると嬉しそうに体をふるふるさせる。そしていまだに荒い呼吸で呆然としている父さんを尻目に居間へと戻るのであった。

「ウィル、パパ起きたかしら。」

「起きたよ、もう来ると思う。」

そう言つて席に着く、今日も美味しそうなご飯、くろこしょうのかかった目玉焼きがいい雰囲気を出している。

こういうの好きだなシンプルで　くろこしょうの味って男の口だよな。

少しすると父さんも席についた。

「おはようパパ、なんか顔色悪いけどどうしたの？」

「おはようレイ、なんかガラスの鉢だけかぶって海流の中を渡る夢見た。」

よっぽど苦しかったのか意味のわからない夢の話をする父さん。

しばらくはげんまりしていたが、ようやく戻ったのかいつもの調子で話します。

「お、そういえば今日はウィルの旅立つ日だったな。」

そう、今日は俺がアリストと共に旅立つ日、家族揃つての食事もしばらくはお預けである。

だからと言ってやることは変わらない、父さんが両手を合わせると

俺達もそれに続く、そして声を揃えて、

「いただきます。」

我が家の食事がはじまった。

朝食が終わり、部屋にてこの日のために準備しておいた荷物の再確認をする。

武器は当然のこと、クライドさんからもらった小太刀としゅりけんの手入れはかさず行なっている。

その他着替えや薬草など必要となるものがちゃんと入っているか袋を確認していく、わかってはいたけどやっぱり結構な大荷物にはなるな……。もう少し減らすべきかどうか悩んでいたところに、

「ウィル、ちょっとこっちに来て〜。」

母さんに呼ばれる声が耳に届き、声のした場所に行く。

そこには後ろ手に何かを隠し、いつもよりもここにこしている母さんがいた。

「どうしたの、母さん？」

「うふふ、ウィルにプレゼントがあるのよ、じゃ〜ん！」

そう言っただけで俺の前に出したのは袋。

まじまじと見てみる、うーん、どこからどう見ても普通の袋だ。

それに俺の持つて行こうとしている袋より小さい、正直中途半端な大きさで、もらっても有効活用できるか不安である。

「あ、ありがとう、でもこれだとちょっと大きさが…。」

「あらあら私がただの袋を渡すはずないじゃない。」

そう言うとき椅子を持ち上げて袋に入れようとする、いや、なにしているんだこの人。

と思っていたら次の瞬間にゆるっといった感じで椅子が袋の中に吸い込まれてってええ!?

「え!?! ちょ、これって!?!」

「驚いてるわね、これが母さんの研究の成果よ。」

ふふふんと得意げな母さん。

なんでも中の空間を圧縮しているらしく、そのおかげで重くなることもなくほぼ無尽蔵に物が収納できるようだ。

しかも内部は時間も止まっているので、食べ物鮮度なども保ってくれるとのこと。

仕組みについては聞いても理解出来ないと思ったのでやめておいた、世の中不思議なことっていっぱいあるんだね!

ちなみに名前は「四次元袋」というらしいが、なぜか危険な気がするためただの袋と呼ぼう。

「他にも色々とこの中に入れておいたから暇な時にでも見てね。」

袋を手渡される俺、それにしてもこれで荷物の問題が解決したな。



ウィルの旅立ちに間に合ってよかったわ〜と嬉しいことを言ってくれる母さん。

そんな俺達のやり取りを指をくわえて羨ましそうに見る存在、そう、父さんである。

「レイばかりずるいぞう！俺もなにかウィルにあげたいのに！」

子供のようなことを言って部屋に駆け込む父さん、どうしよう、いないもの渡されたら…。

どたばたガチャンとうるさい音が聞こえてくる、今頃あの中はひどい有様に違いない、

きつと後で母さんからお仕置きを受けるんだろうな！。

しばらくして騒音が静まり、父さんが部屋から出てきた。その手には丸められた布？のようなものが握られている。

「俺がウィルに渡すのは、これだ！」

ドヤ顔で手に持った物を両手でぱつと広げる。

どうやら地図だったらしく、何やら図面が描かれていた。

でもそこに描かれているのは…俺の家の内部？

「父さん…。」

「な、何だその冷めた視線は！いいからまずは話を聞け！」

絶対零度の視線を送る俺、そりゃあこれから旅にでるっていうのに家の図面なんて渡されたら誰だって怒りを通り越して呆れるに決まっている。

そんな俺の様子に焦った父さんが説明しはじめる。

これは不思議な地図というらしく、現在いる位置にあわせて地図自体が変化する、

今は俺の家にいるからその内部が浮き出ているということだ。

ただし魔物が多く魔の力が強い洞窟などでは効果が発揮されない場所もあるらしい。

なるほど、地図を複数持ち歩かなくていいのは確かに楽だ、袋があるからいいといえばいいんだけど。

それにしてもここまで便利な地図があつてフローミも使えるのになぜ父さんはよく迷子になるんだろう？

「わからん、俺もちゃんと見てはいるんだけどな…。」

くると地図を回しながら言う父さん、ああ、それだよ。

大体迷う人って地図見ても自分の現在地を把握できないから地図をいろんな角度から見て

結局何がなんだかわからなくなるんだよな。

とにかく両親から旅をする上でこれほど便利な物はないっていう物を渡され、改めて感謝の言葉を伝える。

父さんは照れくさそうに頬を掻き、母さんはいつも通りに「ー」としていた。

荷物をまとめ終え玄関に立つ、いよいよ出発の時が来た。

振り返ると二人も同じように立っている。

「それじゃあ父さん、母さん。」

「おう！折角なんだからたくさん楽しんでこい！」

「疲れたらいつでも帰ってくるのよ。」

「モモちゃんもウィルのことよろしくね。」

頭の上のモモが一声鳴き、扉を開け外に出る、そしてもう一度振り返り、

「行つてきます！！」

大きく声を出し再会のため別れの挨拶をする。

行つてこい！いつてらっしゃい！と言う両親の言葉を背中に受けながら俺は住み慣れた家から離れた。

俺が今いるのはアリアハンの城門前。

今日は朝からアリストが王様への謁見を行うことになっているため、終わったらすぐ出られるよう城の前で待ち合わせることにしたのだ。

ゴゴゴゴ…と鉄格子の扉が開かれ、その中からアリストが出てくる。俺に気づくと小走りで近寄ってきた。

「ウィル！ごめんね、待たせちゃった？」

「いいや、俺も今来たところだよ。」

なんだか恋人同士のような会話だなと思いつつ、どうだったと聞いてみる。すると少し疲れた様子で、

「謁見は何もなかったんだけどその後が大変だったよ…。」

と語りだすアリスト、王様からはバラモスと言う名の魔王を倒せと言われ、少しのお金と装備品を受け取り謁見は終了したのだが、その後がやれ「さすがはオルテガさんの息子だ！」とか「あの人が噂の…ぽっ」とか周りがうるさくて仕方がなかったらしい、特にお姫様なんかは、

「必ず魔王を倒してください！そ、そして私を…。」

と猛烈にアタックを仕掛けてきて、ごまかすのに必死だったらしい。モテモテで羨ましい限りだ、お姫様とお近づきになれるチャンスじゃないか。

「…それ、本気で言ってる…？」

吹き出す黒いオーラに驚いてじよ、冗談だよと返しておく。

たまにこいつはこの状態になるけど発動条件が全くわからない、が一つだけ言えるのは母さん譲りの怖さだったことだ。

ま、俺達にはまだ恋だの愛だのっていうのは早いか、いつか俺にもできるのかなあ…。

気を取り直して元に戻ったアリストと話しはじめる。

王様が言うにはルイーダの酒場に行って仲間を揃えてから旅立ったほうがいいとのことだったので。

「じゃあ早速行こうぜ。」

「え？ボクとウィルの二人でいいじゃない？」

きょんとした顔で言うアリスト、モモが自分もいるとびいびい言っている。

と言うかちよつと待て、なぜその結論に至った。

「俺達は今から魔王を倒しに行くんだぞ？ただでさえ足手まといになりかねない俺がいるってのに二人はまずいだろ？」

「大丈夫！その分ボクが全部カバーすればいいだけの話じゃない！」

「それでも人数が多いに越したことはないさ、お前の父親だって一人じゃなかったら何とかなった場面もあったかもしれないだろ？それともどうしても二人じゃないといけない理由でもあるのか？」

「う！そ、それは…だってウィルと二人つきりになれる時間が…。」

なんか小声で言ってるみたいだけどさっきから自分アピールを繰り返すモモの声で聞こえん。

もちろんお前を忘れてるわけじゃないんだ、でも人にはカウントされないじゃないか。

ガン！とシヨックを受けて青くなるモモ、ピンクなのに青いとはこれいかに。

それからアリストを説得したりモモを慰めたりして話し合った結果、俺達に足りないのは防衛力だということで、一人だけ仲間を加えていこうと話になった。パーティの壁役をしてくれる人を探しに行くために酒場へと向かう。

そうしてやって来ましたルイーダの酒場。

中に入ると様々な出会いを求める人達が会話したり互いに酒を酌み交わしたりしている。

奥のカウンターには綺麗な女の人が店を切り盛りしている。

おそらくはこの人がルイーダさんだろう、アリストが話しかける。

「あの、すみません…。」

「あら、いらつしやいお嬢ちゃん。」

「おじよ…！ボクはまだ男です！」

いきなり女呼ばわりされて頬を膨らませるアリスト。  
まだって何だまだって。

「男の子だったのね、ごめんなさいねボク。それでここにどういったご用件かしら？」

「ボクって…、もういいや…。仲間を探しに来ました、しょくぎょうはせんしで無口で寡黙なタフガイをお願いします！」

これはアリストが譲らなかった条件で、タフガイはわかるが無口で寡黙はなんでだ？

と言うか無口と寡黙は似たような意味だが、仲間になっても会話が

成立するか不安だ。

「無口で寡黙でタフガイとなると…、あ、ちょうどいい人がいるわね。シュウさん！」

ルイーダさんに呼ばれてやってきたのはいかにもせんしですという見た目の男の人だった、タフガイなんだから当たり前か。全身を覆うような鎧を着込んでいて、なんというかこう…鉄壁？

「呼んだか…？」

「ええ、この子たちがあなたをご指名なんですけれどもどうかしら？」

俺達を見るシュウさん、アリストとモモは眼光にびびっている。そんな様子を見て何か得るものがあつたのか、

「…いいだろう、お前たちを魔物の攻撃から守ってやる。」

どうやら仲間になってくれるみたいだ、しかも一瞬で自分の位置を理解している。

それからお互いに自己紹介をし、旅の目的なども話す。

さすがに少し驚いたのか目を見開いていたが、「面白い…。」と言っていたので、割と好戦的なかもしれない。

無口だがこちらの話を聞かないということではなく、むしろちゃんと受け答えをしてくれる。

アリストはもう気を許したのかももう普通に話している、モモはまだ怖がっているが。

こうして新たに頼れる仲間が加わり、とうとうアリアハンの城から旅立つ。

最初の目的は、大陸から脱出するために、大昔に封鎖してしまった旅の扉を解放することである。そろそろ封印を解いてもいいのではないかという話が前々から城の中でもあつたらしく、丁度良く現れた勇者にやつてもらおうということらしい。

胸元にしまつてあるレベルを示す紙切れを見つめる。

今は3となつているこの表示が20になつた時俺の冒険は終了するかもしれない。

でもその時までには精いっぱいやろう、アリストの力になろう。

決心を新たにし顔を上げる、眼の前には広大に続く緑の草原。

先に行った二人において行かれなよう第一歩を踏み出すのであつた。

おまけ

「シュウさん…。」



「なんだ…?」

「これからずっと旅をすることになると思うので、先にボクの本当の目的を話しておきます!」

……アリスト説明中……

「というわけで絶対にウィルには手を出さないでください!お願いします!」

「あ、ああ…。」

「絶対ですよ!ホントですよ!あ、ウィル、待ってよー!」

ぱたぱたとウィルのもとに走っていくアリスト、それを見つめながらシュウは、

「…。」

ついていく相手を間違えたかと頭を抱え、ウィルにはもう少しやさしく接しようと思心に決めたのであった。

シュウが なかまになった!

## 第十六話 別れと出会い（後書き）

ドラクエシリーズ御用達の謎の袋はレイさんが作ったんですね。

不思議な地図はそれほど大きなイベントでもないし、Rボタンで開くとか書くわけにもいかないんでここでいいかなって出しました。

そして新しいメンバーせんしのシュウさん。

当初はぶとうかだったんですけどウィルと被りそうだったのでせんしへ。

性格はくろくにんも良かったんですけどタフガイの響きが素晴らしくて。

次回はまたさらっと人物紹介でもします。

## 人物紹介 そのに（前書き）

という訳でさらっと人物紹介第二回です。

## 人物紹介 そのに

クライド 男 性格いっぴきおおかみ

全身黒づくめの装束に身をつつんだミステリアスな人物、最大Lvは94。

報酬さえ貰えれば必ず依頼を達成させるプロ。

仕事に私情は関係ないとなれ合いを好まない。

戦闘は短めの刀、小太刀による一撃必殺の暗殺術、相棒インターセプターとの連携や奥義「なげる」によるゲリラ戦法を行う。

ロック、レイとは旧知の間柄で、ロックの依頼によりウィルの戦いの師匠となる。

はじめはいつも通りただの仕事だと思っていたが、自分以外に懐かないはずのインターセプターがウィルには心を開いていたため、戦いの全てを教えることにした。

ウィルにとっては厳しくもあり優しくもある良い師匠で、彼はクライドのことをもう一人の父親のように慕っている。

一人娘がいるのだが過去の自分の罪を清算するまでは会いに行かないと決めていて、ウィルに娘の姿をかぶらせ自分の子供のように思っていたが、いいところでロックに邪魔された。

最近は一刀流になれたことに割とご満悦。

アイラ 女 性格おとこまさり

見事なスタイルを持った黒髪の剣士、最大Lvは81。

元々は踊り子としての生を受けたがその運命を嫌い親に反発、部族を飛び出し旅に出る。

途中危機にあったところをロック、レイ夫妻に助けられ関係を持つ。戦闘方法は通常の剣技の他に、踊りをミックスさせた攻撃を行う。特に奥義つるぎのまいは流れるような動きで敵の攻撃をかわしつつ連撃や強烈な一撃を叩き込むという回避と攻撃を同時に行える技。

クライドと同じくロックに呼ばれアリストの師匠となった。

アリストの踊りが悪い意味で想像以上だったため苦労したが、ある程度形になるまでは育て上げた。面倒見はいい性格なのでアリストにとっても姉のような存在になっている。

彼の本当の気持ちを知る数少ない一人である。

最近は出会いがないかなーとぶらぶらしている。

モモ スライム 性格???

世にも珍しいピンクのスライム。

訓練のためウィルが訪れた森の中で他のスライムにいじめられていた。

そこを彼に助けられ家族の一員となる。

ウィルの頭の上がお気に入り、基本的にはその位置にいる。

アリストとは仲が悪くよく喧嘩をしている。

ウィルとの連携攻撃の練習もはじめ、今では目で通じ合えるほど。専用必殺技を欲しがっており、ウィル命名のボディアタックでは駄目だと試行錯誤中。

ボディアタックの中でお気に入りにはジャンピングゴリラステーション

ン。

一人称、というか「ぴい」しか言えない。

最近はウィルに伝えたい事があるのか必死にアピールしているが、彼にはどう頑張ってもぴいぴい言っているようにしか聞こえない。

シュウ 男 性格タフガイ

ルイーダの酒場にてアリストが選んだ冒険者。

表向きの理由は「チームの防御の要が欲しい」、だが本当の理由は「自分とウィルの仲のじゃまにならない人」だったりする。

選ばれた理由の通り防御がカッチカチ、そして無口。

戦士の為攻撃力にも定評があり戦闘では活躍が期待できる。最大Lvは83。

無口とは言っているがコミュニケーション能力がないわけではなく単に口数が少ないだけ。

パーティー内では最年長であるため他のメンバーからよく相談を受けたりする。

口が堅いために、アリストからウィルに対する思いや旅の本当の目的なども聞いた。

その時は自分の選択を一時嘆いたが、強い敵とも戦いたいし、なによりパーティーに居心地の良さを感じているためあまり気にしないことにした。

二人については基本遠くから見てる状態、ただ事情は知っているの  
でウィルには優しい。

実は無類の動物好き、笑顔を見なければそのタイミング。でもコワモテが災いし動物には怖がられるため気にしている。

武器は戦士の装備できるものなら何でもOK。

一人称は「オレ」

最大Lvを決めた時の作者

ウィル…こいつがこうじゃないと始まらないよね。

アリスト…まあ、勇者だし。

ロック…ロック 69 ヤダ卑猥！ 96。

レイ…お母さん 母 88。

クライド…94、急に死ぬ。もしくは足して13でゴゴ的な。

アイラ…081 おっばい。

シュウ…ドラクエでカッチカチ…？ハッサン、ハッサンや！ 83。

## 人物紹介　そのに（後書き）

相変わらずさらっとしています。

最大Lvはもう本当にこんな感じで決めました、ごめんなさい。

次回は本当に冒険の始まり、でも序盤はさらっで行きます。

さらっとの響きがなんか癖になってきました。



## 第十七話 危険物にはご注意（前書き）

少し間があいてしまいました、書く時間が取れなくて…。  
だいぶ原作とは変わってきました、今更ですが。

## 第十七話 危険物にはご注意

アリアハンの町から出発した俺たちは、大陸の北に位置するレーベの村を目指すことにした。

封印された旅の扉がある洞窟、いざないの洞窟と呼ばれる場所は大陵の東にあり、周囲を山や川に囲まれたアリアハンからは直接向かうことは困難なため、情報収集なども兼ねて立ち寄ることにしたのだ。

目的地が決まった俺たちは草原をひたすら歩く。

サクサク、サクサク…

三人の足音が鳴る。

この辺の魔物に強力な奴はいないが、いつ襲われるかはわからない。なので多少の警戒をしながらの移動のためそれぞれ口数は少ない、ただモモだけは退屈なのかびいびいとのかきに歌なんかを歌っている。

しばらくはそうやって歩き続けていたが、ふと気になったことがありアリストに聞いてみた。

「なあ、アリスト。」

「なーに？ウィル。」

「思うんだが、大陸を脱出するなら母さんにルーラを使ってもらえばよかったんじゃないか？」

「…え？」

ご存知ルーラは自分の立ち寄ったことのある場所に瞬時に移動できる呪文だ。

母さんなら昔色々なところに旅をしていたはずだからきっとアリアハン以外のところにも行けるのではないだろうか。

もしくは父さんにキメラの翼を使ってもらってもいいかもしれない、キメラの翼はルーラと同じ効果を持った道具なので父さんが使えばかなり選択肢が広いに違いない。

俺にもっともな意見を言われ、そんな事考えもつかなかったという顔のアリストは急に焦りだす。

「そ、それはさ！もう旅の扉が封印されてからずいぶんと時間が経ってるでしょ？きつと皆もそろそろ自由他ところに行ってみたとか考えてるはずだからさ！困っている人々を助けるのは勇者として当然のことというかなんというか…。」

最後の方は自分でも何を言っているのかわからなくなったアリストはいまだに何か弁明を続けている。

あいつはとりあえず置いておいて俺はシュウさんにも聞いてみた。

「シュウさんはここの出身なんですか？」

「…ああ。」

残念、シュウさんが別の場所の生まれならそこに行けるかなと思っただけだ。

俺たちが今使ってもアリアハンに戻るだけだからな、むしろ逆効果だ。

しかしせっかくの長旅なのにいきなり近道してしまうのもおかしいか。

気を取り直して俺はアリストにそう告げ、移動を再開したのだった。

レーベの村まではそこまで距離は離れておらず、日が暮れる頃には辿り着くことができた。

途中の戦闘？特に語るようなことはなかったので省略だ。

今日はとりあえず宿に泊って明日色々と探索をしようということになり、アリストが代表して部屋を取りに行ったのだが…。

「ごめん、部屋がいっぱいみたいで二人部屋しか取れなかったんだ…。」

「二人って…、全然混んでるようには見えないんだけど…。」

周りを見ても俺たちの他に泊り客はいないように見える。  
部屋が空いてないなんてことはなさそうなんだが。

「あ、えつと、そう！予約！予約の人が後から来るらしいんだ！」

空気がなくなるほどの予約？団体客でも来るのだろうか。  
それなら逆に一部屋でも取れたことに感謝するべきか。  
でも困ったな、一人余ってしまう。うーん、仕方ないか。

「俺は床で寝るから二人で使ってよ。」

幸い袋の中には野宿もできるような道具も入っている、雨風をしるだけ外よりはましだろう。

おおモモ、お前も一緒に寝てくれるのか、嬉しいこと言ってくれるじゃないの。

さーて寝床でも作りますかと袋の中身をだそうとした所で

「だ、ダメだよウィルが床でなんて！」

アリストに止められた。

だってさすがにシユウさんに床でなんて言えないしお前を寝かせるくらいなら自分を選ぶぞ、俺は。

「それならさ、ボクと一緒に寝ない？昔みたいにさ。」

最初それも考えたんだがむしろアリストが嫌がるかと思って言わなかったんだが。

でも向こうから提案してくるなら大丈夫か。

「じゃあそうするか。」

「う、うん！」

いつの間にか既にベッドの中にいたアリストがこっちこっちと手招いてくる。

小さい頃は結構一緒に寝ることはあったが最近はずがに無かったからな、少し気恥ずかしい思いもあるが背に腹は代えられない。シユウさんにお休みなさいと言ってからベッドに入った。

「すーすー。」

「早いな、もう寝たのか…。」

すぐに寝息が聞こえてきた、きつと疲れていたんだろう。  
俺も明日に備えてしっかり寝ないとな、と思っているとアリストが  
こっちに手を回してきた。

寝ぼけているんだろうか、でも俺はぬいぐるみじゃないぞ。

などと考えていたら妙に赤い顔をしながらこっちにじり寄ってくるアリスト。

「というかやけに顔が近くないか？つておい！なぜこっちに迫ってくる！」

逃げようと思ったが体をがちり固定されていて動けない、こいつホントに寝てるのか！？

確かにこいつは女顔で可愛いのかもしれんが俺にはそういう趣味はないぞ！

ま、まずい…もう顔がすぐそこまで、だれか、だれか助けてくれ！

「ぴい！」

「むぐ！」

すんでの所でもモモが間に割り込んでくれたおかげで俺の唇は守られた。

するとアリストの手からも力が抜け脱出することができた。やっぱり起きてるんじゃないかこいつ？

「ありがとうモモ、助かったよ。」

「ぴいぴい！」

モモにお礼を言うと、次からこういうことがあった時は床で寝ようと決心し目を閉じる俺であった。

次の日、そこにいたのは朝から不機嫌なアリストと渋い顔をしたシユウさん。

シユウさんにはこれから部屋はオレが取ってやると言われた。

ちよつと居づらい空気を感じた俺は、別行動で情報収集してはどうだろうと提案してみた。

とは言ってもそこまで大きい村ではないため、昼を目処にまたここに集合ということにしよう、と言うと。

二人もそれに頷き、アリストはモモと話があるから借りていくねと言ってモモを連れていってしまった。

そうして一人になった俺は村の人たちに話を聞いてまわることにしたのだが、なかなか有力な情報を得ることが出来ずぶらぶらしていると、町の外れで大きな岩を押そうとしている人を発見した。

「どうしたんですか？」

「よいしょ、よいしょ…あ、いえね、この岩をここからどかしたいんですがびくともしなくて…。」

「良かったら俺がやりましょうか？」

これくらいなら腕の強化でなんとかなるだろう。

俺は腕に力を込めると、岩を押しはじめた。

ズゴゴゴゴ……

それほど苦勞することもなくどこかすことに成功する。

「やや！これはすごい！」

「いえいえこのくらいなら軽いものですよ、ところでなぜこの岩を動かそうとしてたんですか？」

「ああ、それはですね……。」

ここを見てくださいと指をさす村の人、そこには鳥の巣があった。

「この鳥は地面に穴を掘って巣を作るんですが岩で塞がれてしまっていてましてね。」

それで動かそうとしていたんですが、いやいやお恥ずかしいと村の人。

なるほど、そういう理由があったんだな。なんにせよ助けになれてよかった。

そんなことを考えていると、一羽の鳥が俺の周りを飛びはじめた、ありがとって言うてくれているような気がする。

「ふむ、あなたはどうかやら動物に好かれやすいようですね。それにも理由も聞かずに私の手助けをしてくれるやさしい心を持っているようですし、あなたになれば渡してもいいかもしれません。」

急に一人で納得のいったような顔をしながら語りだす村の人、一体何の話だろう？



「実は私便利な鍵を手に入れましたね、自分では使わないので誰かに譲ろうと思っていたのですがなかなかこれという人がいなくて。」

そこにあなたが現れたということですよ。

そう言つて俺に鍵を手渡してくる、鍵にはバコタと刻んであり、不思議な形をしている。

「それは盗賊の鍵といいましてね、簡単な扉ならそれ一つで問題なく開けられるはずですよ。」

なんかすごい鍵を手に入れてしまった、ど、どうしよう！

岩を押しただけでもらつていいものなのだろうか？それ以前に俺が悪用するとは考えないのだろうか？

鍵を手にお口お口している俺の心が読めたのか、おかしそうに村の人は言う。

「ふふ、そうやって悩んでいる時点であなただが悪いことができないというのはわかります、私はこう見えても人を見る目はあるんです。もしどうしても使いたくなかったら捨ててしまえばいいですよ。」

では私はこれで、精霊の加護があらんことを…。

そう言つてどこかへ行つてしまった村の人。

ふと周りを見ると大きな岩も、鳥の巣もなくなっている。

何か夢でも見ていたような気になったが、手に持つ鍵だけはしっかりと重みを残しており、もういなくなつてしまった人に対して感謝の言葉を告げると、集合場所へと戻るのであった。

集合場所につくと既に全員が揃っていた。

アリストとモモにはところどころケガをしたような後がある、また喧嘩したのかこいつらは…。

シュウさんは相変わらず物静かに立っている。

「それで手がかりは見つかった？」

「ごめん、ボクは何も…。」

「ぴい…。」

うなだれる一人と一匹、そもそもお前たちは情報収集をしたのか？  
シュウさんにも聞いてみる。

「…村の外れに封印を解く研究をしている人物がいる。」

話によるとその人物は研究に没頭するあまり、家から出てくることがほとんど無いんだとか。

そのせいか家には鍵がかかっており、直接会うことは出来なかったそうだ。

さすがシュウさん、やることはきっちりやってくれる。シュウさんが聞き込みをしてる姿とか全く想像できないけど。

でも鍵か…不法侵入になっってしまうかもしれないがそんなことも言ってられないか。

俺はさっきの出来事を話すと、その人物の家へと向かった。

「…っだ。」

シュウさんに案内されついた家の前、確かに扉には鍵がかかっている。

俺は扉に近づくと鍵を使ってみる、するとあっけなく扉が開いた。

「ほんとにすごいねその鍵…。」

「ぴい。」

改めて鍵の悪用に気をつけようと心に決め、

とりあえず家の中に入るとまず目に入ったのは大きなツボ、中ではなにか煮ているのかぐつぐついつている。

一階にはいないようなので二階に行ってみると、おじいさんが一人座っていた。

「む、何じゃお前さんたちは。ここには鍵がかかっていたはずじゃが。」

「えっと、それは…。」

隠しても仕方が無いと盗賊の鍵を使ってここに入ったことを告げ謝る。

最初は驚いていた様子だったが、真剣に謝ったことで許してくれた。それから事情を説明すると、

「ほう！あの封印を解きたいとな！」

「はい、アリアハン大陸から脱出するための方法を研究をしていると聞いてやって来ました。」

「なるほど、ではあれを渡さなばなるまい。じゃがまだもう少しだ

け時間がかかりそうなんじゃ。」

明日までには間に合わせてみせるからのうと言われ、次の日またここに来ることになった。

せつかく来たんだからゆつくりしていきなさいと少し話をする事になったのだが、このおじいさんは若い頃に旅の扉が封印されているのを見てから生涯をかけてでも解いてやろうと今まで研究を続けてきたそうだ。

「閉鎖されてしまったこの大陸に昔のように人々が訪れて欲しい、その一心でここまで来たんじゃないよ…。」

人生をかけた研究が完成するかもしれないというこの時期にちょうど現れた俺達に運命を感じたらしい。

途中から運命といえど…と昔の青春話に発展して止まらなくなってしまうのでこっそり抜けだしてきたが、一つのことここまです本気で向き合えるという部分には少し憧れた。

さて、明日まですることがなくなった俺たち、どうしようかなと話していたのだが、ふとアリストが「封印されているところを見てみたい」と言い出した。

確かにちよつと興味はあるな、そんなに遠くもないし行ってみるか。シユウさんも構わないといってくれたので、俺たちは旅の扉のあるいざないの洞窟へと向かった。

到着したいざないの洞窟、なるほど壁で道がふさがっている。

「でも呪文とかで守られてるわけじゃないんだね。」

「確かに、ほんとにただの分厚い石壁つてところだな。」

これなら壊せるかもねと言って試しに壁を殴るアリスト、手を痛めていた。

俺も試しにやってみる、うん、やっぱり固い。手を痛めた。

シウさんならどうだろう？ やっぱ無理だったようで手をぶらぶらさせていた。

モモ…は無理だろうなあ…。

「ぴいー！」

俺の言葉に気を悪くしたのが高く飛び上がると回転しながら突撃するモモ。

あ、あれは未完成の奥義アスカブンカアタック！（俺命名）。  
勢いよく壁に向かって行きビターン！

「ぴ、ぴい…。」

背中から激突したモモは力なくべしゃつと崩れ落ちた。  
わかつてはいたことだが痛そうだなあれ…。

ピクリとも動かないモモを回収する、生きてるかー？

「むー！ならこれでどうだ！」

ヤケになったアリストが投げつけたのは小瓶…？

あれはボムか、さすがにあれでも無理だろう。

メラを放ち着火させるアリスト、次の瞬間。

チュガガガアアーーーーーン！！！！

轟音と共にものすごい爆発をした小瓶はまばゆい光を放ち、その光がおさまる頃にはそこに壁はなく、先へ続く道だけが残っていた。

近くにあった宝箱のようなものも焼け焦げており、中には地図らしきものがあつたみたいだが見るも無残なことになっていた。

「あ、アリスト？あれは一体…？」

「レイさんから危険だから気をつけて使って一つだけもらったのがあつただけ…。」

まさかあそこまで威力があるなんて…と心底驚いた顔で言う。  
母さん…あなたは本当に一体何者なんですか…。

そしてアリスト、そんなものをこんな所で使うんじゃない！  
罰としてげんこつ！

「うゝ…痛いよウィル…。」

「痛くなかったら意味ないだろ。それにしてもどうしようかこれ…。」

「

おじいさんの生涯をかけた勝負だつたんだよな、この封印。  
こんなあつさり解いちゃって大丈夫なんだろうか…。

このまま先に進んでしまうのはあまりにも後味が悪いので、一旦レ  
ーベの村に戻ることにした。なんて説明しよう…。

「なん…じゃと…?」

おじいさんにいざないの洞窟で起きたことを話す。

どんどんと顔をうつむかせていき、一言も話さなくなってしまった。

「あの、本当にすみません！ボクあんなことになるなんて思わなくて…。」

罪悪感からか必死に謝まるアリスト、俺も一緒になって謝る。

シウウさんも少しバツの悪い表情をしている、ちなみにモモはまだ目を覚まさない。

しばらくはその状態が続いていたが、おじいさんは顔を上げると大きな声で言った。

「素晴らしい！ぜひその技術をワシに教えてくれんかのう?」

…え?

「実はワシの作っていた魔法の玉も似たようなものなんじゃがな、話を聞くにそちらのぼむとやらの方が性能がよさそうじゃ!」

…あれ?

「確かに封印は生涯の相手じゃったが、最近は強い爆発にも興味があつてのう。一つの夢が終わったならば新しい夢に向かうのが男つてもんじゃろう!」

…え、ええ。

「しかしあまり近所迷惑もいかなのう、そうじゃ！空にむかつて打てば問題なしじゃ！ついでに色とりどりの火花を散らせばきっと美しいに違いない、夢が広がるわい！で、教えてくれるのかのう？」

…それならアリアハンにレイって人がいるので…。

「レイさんじゃな？その人に聞けばいいんじゃないよっしや、善は急げじゃ！早速向かうとするか！」

ありがとうよー！と言って風のように去っていったおじいさん。

「…。」

「…。」

「行こうか？」

「うん。」

「…ああ。」

いまだに起きないモモを抱っこしつつ、新たな大陸へと向かう俺たち。

後の世に伝説の花火職人として語り継がれる一人の老人の物語が今はじまったのであった。



## 第十七話 危険物にはご注意（後書き）

まさかのナジミの塔の省略、場面が変わりすぎて忙しくなりそうだったのだ。

魔法の玉が爆発物ならボムでもなんとかなるかなと思いきんなオチに。

戦闘がないのは作者の力量不足です。

ではまた次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8167y/>

---

Lv20

2011年12月19日18時01分発行